

奈良県桜井市

脇本遺跡の調査



2019. 8. 1

磯城・磐余の諸宮調査会

奈良県桜井市

脇本遺跡の調査

2019. 8. 1

磯城・磐余の諸宮調査会



脇本遺跡 遠景（南西より）



脇本遺跡 第4次調査 SB4002（南より）



脇本遺跡 第1次調査 SB1001の柱穴掘形と柱痕跡（南東より）



脇本遺跡 第3次調査 SA3001（東より）

序

私達の桜井市は大和平野の東南部に位置し、市域の約3割を占める平野部の中央には山地より流れ出る粟原川、寺川、初瀬川、巻向川等の清流を集めた大和川がほぼ東西に横断し、この大和川を挟んで南は茶臼山古墳をはじめとしてメスリ山古墳、安倍寺、上之宮遺跡、坪井・大福遺跡、北では芝遺跡、箸墓古墳、纏向遺跡など、全国的にも貴重な文化遺産が数多く知られています。

「磯城・磐余の諸宮調査会」は昭和56年に実施された朝倉小学校体育館建設予定地の発掘調査において、宮跡の存在が指摘される遺構群が確認されたのを受け、奈良県立橿原考古学研究所と桜井市が中心となって、『記・紀』に記された磯城・磐余地域の諸宮の実態解明と保存を目指して昭和59年に結成されたものです。

調査会では朝倉小学校に隣接する脇本遺跡において、昭和59年から平成元年までの6年間に都合7次の調査を実施し、5世紀後半・6世紀後半・7世紀後半と3期の建物群を検出しました。

これらの建物群は、今日では雄略天皇の泊瀬朝倉宮や欽明天皇の泊瀬柴籬宮、天武天皇の初瀬斎宮に比定される存在となっており、調査会の調査は当初の目的どおり、宮の存在を検討する上で極めて重要な成果を挙げたと言えるでしょう。

本報告書の刊行にあたり、発掘調査から報告書の刊行までを直接担当頂いた奈良芸術短期大学の前園先生をはじめとする調査関係者の皆様、遺跡の重要性を御理解いただき、現地調査に協力していただいた地主及び地元協力者の方々には、改めて深く御礼申し上げます。

この多くの皆様の御協力のもとに成った本書が文化財の普及・啓発の一助となり、研究者の方々の資する所となれば桜井市としても望外の喜びであります。

令和元年8月1日

桜井市長

松井正剛

例 言

1. 本書は、奈良県桜井市脇本、慈恩寺、黒崎に所在する脇本遺跡の発掘調査報告書である。本書に所収した発掘調査は桜井市教育委員会による朝倉小学校の体育館建設に伴う第1次調査（朝倉遺跡）と、プール建設に伴う第2次調査（朝倉遺跡）、さらに磯城・磐余の諸宮調査会が行った脇本遺跡第1次調査から第7次調査である。
2. 磯城・磐余の諸宮調査会が実施した脇本遺跡の発掘調査から、本書の刊行までにいたる経費は奈良県及び桜井市からの補助金と（財）由良大和古代文化研究協会からの助成金をあてて実施している。
3. 調査期間と面積は以下の通りである。
朝倉小学校（朝倉遺跡）第1次調査 昭和56年（1981）7月～12月 900㎡
朝倉小学校（朝倉遺跡）第2次調査 昭和58年（1983）4月14日～7月27日 700㎡
脇本第1次調査 昭和59年（1984）4月23日～6月16日 100㎡
脇本第2次調査 昭和60年（1985）2月20日～4月23日 164㎡
脇本第3次調査 昭和60年（1985）12月9日～61年2月22日 210㎡
脇本第4次調査 昭和61年（1986）11月6日～62年1月24日 250㎡
脇本第5次調査 昭和63年（1988）2月4日～4月20日 285㎡
脇本第6次調査 平成元年（1989）1月7日～3月25日 300㎡
脇本第7次調査 平成元年（1989）11月18日～2年1月20日 230㎡
4. 発掘調査の現地担当者は以下のとおりである。
朝倉小学校（朝倉遺跡）第1次調査 萩原儀征 村社仁史（桜井市教育委員会）
朝倉小学校（朝倉遺跡）第2次調査 萩原儀征
脇本第1次調査 萩原儀征 前園実知雄（橿原考古学研究所）
脇本第2次調査 前園実知雄 清水真一（桜井市教育委員会）
脇本第3次調査 前園実知雄 清水真一
脇本第4次調査 前園実知雄 清水真一
脇本第5次調査 前園実知雄 清水真一 橋詰清孝（桜井市教育委員会）
脇本第6次調査 前園実知雄 清水真一
脇本第7次調査 清水真一
5. 現地調査にあたっては下記の方々のご協力、ご指導、ご助言があった。記して謝意を申し上げる。
（敬称略、順不動）
松田新司、森川利治、森川清治、畑中一斉、守田文男、土井実、松本俊吉、厚芝保一、中田祝夫、栢木喜一

6. 脇本遺跡の石材分析については奥田尚氏（橿原考古学研究所特別指導研究員）に依頼し、第4章に報告を掲載した。
7. 現地での写真撮影は調査担当者が行った。遺物の撮影は丹羽恵二、三沢朋未（桜井市教育委員会）武田雄志、福家恭（元桜井市教育委員会）の協力を得た。航空写真は関西航空写真測量株式会社（代表取締役 池田友宏）、株式会社岡本組（代表取締役 岡本繁治）による。
8. 現地調査と整理作業には、下記の諸氏の参加があった。
玉城妙子、アンジェロ・スタニヤフロス、松本美賀、佐々木玉季、西邦和、山本三代子、吉崎文子、大西静子、伊藤仁、山本真理、中谷千賀子、藤井妙子、木場幸弘、上西ゆみ子、青木久子
9. 本書の編集は前園が行ったが木場佳子（桜井市教育委員会文化財課）の協力を得た。執筆は調査担当者が行い文末に記した。
10. 出土遺物、実測図、写真などの調査記録は桜井市教育委員会において保管している。

目 次

序

例言

目次

第1章 遺跡の地理的・歴史的環境	(玉城) 1
第1節 位置と地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第2章 調査の契機と経過	(前園) 7
第1節 調査の契機	
第2節 調査の経過	
第3節 調査日誌抄	
第3章 発掘調査	31
第1節 朝倉小学校地内の調査	(萩原) 31
(1) 第1次調査	
(2) 第2次調査	
第2節 脇本遺跡第1次・第2次調査(燈明田地区)	(前園) 38
(1) はじめに	
(2) 層序	
(3) 検出遺構	
(4) 出土遺物	
(5) 小結	
第3節 脇本遺跡第3次・第4次調査(苗田地区)	(清水) 66
(1) はじめに	
(2) 層序	
(3) 検出遺構	
(4) 出土遺物	
(5) 小結	
第4節 脇本遺跡第5次調査(宮ノ本地区)	(前園) 83
(1) はじめに	
(2) 層序	
(3) 検出遺構	
(4) 出土遺物	

(5) 小結	
第5節 脇本遺跡第6次調査(宮ノ本地区).....	(前園) …100
(1) はじめに	
(2) 層序	
(3) 検出遺構	
(4) 出土遺物	
(5) 小結	
第6節 脇本遺跡第7次調査(宮ノ本地区).....	(清水) …108
(1) はじめに	
(2) 層序	
(3) 検出遺構	
(4) 出土遺物	
(5) 小結	
第7節 まとめ.....	(前園) …115
第4章 自然科学編.....	(奥田) …121
第1節 脇本遺跡の石材の石種とその採石地	
(1) はじめに	
(2) 溝状遺構・石垣状遺構・石敷遺構の石材	
(3) 整地に伴う砂礫について	
(4) 砂礫種構成	
(5) 採石地について	
第5章 脇本遺跡の位置付け.....	(前園) …126
(1) はじめに	
(2) 諸宮調査会以降の発掘	
(3) 文献に見える泊瀬朝倉宮	
(4) 稻荷山古墳出土鉄剣銘文に見える斯鬼宮	
(5) 脇本遺跡は朝倉宮か	

あとがき

報告書抄録

挿 図 目 次

図1	周辺遺跡分布図（1／25,000）	5・6
図2	脇本遺跡・朝倉小学校地内の調査 トレンチ配置図（1／3,000）	9
図3	脇本遺跡第1・2次調査 地区割図（1／150）	11
図4	脇本遺跡第3・4次調査 地区割図（1／150）	15
図5	脇本遺跡第5次調査 地区割図（1／150）	22
図6	脇本遺跡第7次調査 地区割図（1／150）	28
図7	朝倉小学校地内の調査（第1次調査）地区割図（1／200）	32
図8	朝倉小学校地内の調査（第1次調査）平面図（1／200）	33
図9	朝倉小学校地内の調査（第1次調査）石組溝立面・断面図（1／40）	34
図10	朝倉小学校地内の調査（第1次調査）出土遺物（1／4）	35
図11	朝倉小学校地内の調査（第2次調査）平面・断面図（1／200）	37
図12	脇本遺跡第1・2次調査 第1期 平面・断面図（1／150）	39
図13	脇本遺跡第1・2次調査 第2～3期 平面図（1／150）	40
図14	脇本遺跡第1・2次調査 第4期 平面図（1／150）	41
図15	脇本遺跡第1次調査出土遺物（1）（1／4）	44
図16	脇本遺跡第1次調査出土遺物（2）（1／4）	44
図17	脇本遺跡第1次調査出土遺物（3）（1／4）	45
図18	脇本遺跡第1次調査出土遺物（4）（1／4）	46
図19	脇本遺跡第1次調査出土遺物（5）（1／4）	47
図20	脇本遺跡第1次調査出土遺物（6）（1／4）	48
図21	脇本遺跡第2次調査出土遺物（1）（1／4）	49
図22	脇本遺跡第2次調査出土遺物（2）（1／4）	50
図23	脇本遺跡第2次調査出土遺物（3）（1／4）	51
図24	脇本遺跡第2次調査出土遺物（4）（1／2）	51
図25	脇本遺跡第3・4次調査 第1～3期 平面・断面図（1／150）	67
図26	脇本遺跡第3・4次調査 第4～7期 平面図（1／150）	69
図27	脇本遺跡第3・4次調査 第8期 平面図（1／150）	70
図28	脇本遺跡第3次調査出土遺物（1）（1／4）	73
図29	脇本遺跡第3次調査出土遺物（2）（1／4）	74
図30	脇本遺跡第4次調査出土遺物（1）（1／4）	75
図31	脇本遺跡第4次調査出土遺物（2）（1／4）	76

図32	脇本遺跡第4次調査出土遺物(3)(1/4).....	77
図33	脇本遺跡第5次調査 第1～3期 平面・断面図(1/150)	84
図34	脇本遺跡第5次調査 第4期 平面図(1/150)	85
図35	脇本遺跡第5次調査出土遺物(1)(1/4).....	87
図36	脇本遺跡第5次調査出土遺物(2)(1/4).....	88
図37	脇本遺跡第5次調査出土遺物(3)(1/4).....	89
図38	脇本遺跡第5次調査出土遺物(4)(1/4).....	90
図39	脇本遺跡第5次調査出土遺物(5)(1/4).....	91
図40	脇本遺跡第5次調査出土遺物(6)(1/4).....	91
図41	脇本遺跡第5次調査出土遺物(7)(1/1).....	92
図42	脇本遺跡第6次調査 第1～3期 平面・断面図(1/150)	101
図43	脇本遺跡第6次調査 SB6001と下層のSI6001～6003 平面図(1/100)	102
図44	脇本遺跡第6次調査出土遺物(1)(1/4)	104
図45	脇本遺跡第6次調査出土遺物(2)(1/4)	105
図46	脇本遺跡第7次調査 平面・断面図(1/150).....	109
図47	脇本遺跡第7次調査 土坑SK7001内出土の馬歯と杯 平面図(1/10).....	110
図48	脇本遺跡第7次調査出土遺物(1)(1/4)	111
図49	脇本遺跡第7次調査出土遺物(2)(1/4)	112
図50	脇本遺跡第7次調査出土遺物(3)(1/2)	112
図51	調査区全図(1/2,000)	119
図52	脇本遺跡 遺構変遷図	120
図53	脇本遺跡第5次調査 石垣状遺構石材(1)	122
図54	脇本遺跡第5次調査 石垣状遺構石材(2)	122

表 目 次

表1	『記』・『紀』に記された桜井周辺の宮名	3
表2	脇本遺跡・朝倉小学校地内の調査一覧.....	9
表3	朝倉小学校地内の調査(第1次調査)出土遺物観察表(1)	34
表4	朝倉小学校地内の調査(第1次調査)出土遺物観察表(2)	35
表5	脇本遺跡第1次調査出土遺物観察表(1)	52
表6	脇本遺跡第1次調査出土遺物観察表(2)	53
表7	脇本遺跡第1次調査出土遺物観察表(3)	54
表8	脇本遺跡第1次調査出土遺物観察表(4)	55
表9	脇本遺跡第1次調査出土遺物観察表(5)	56

表10	脇本遺跡第1次調査出土遺物観察表(6)	57
表11	脇本遺跡第1次調査出土遺物観察表(7)	58
表12	脇本遺跡第1次調査出土遺物観察表(8)	59
表13	脇本遺跡第1次調査出土遺物観察表(9)	60
表14	脇本遺跡第2次調査出土遺物観察表(1)	61
表15	脇本遺跡第2次調査出土遺物観察表(2)	62
表16	脇本遺跡第2次調査出土遺物観察表(3)	63
表17	脇本遺跡第2次調査出土遺物観察表(4)	64
表18	脇本遺跡第2次調査出土遺物観察表(5)	65
表19	脇本遺跡第2次調査出土遺物観察表(6)	65
表20	脇本遺跡第3次調査出土遺物観察表(1)	77
表21	脇本遺跡第3次調査出土遺物観察表(2)	78
表22	脇本遺跡第3次調査出土遺物観察表(3)	79
表23	脇本遺跡第4次調査出土遺物観察表(1)	80
表24	脇本遺跡第4次調査出土遺物観察表(2)	81
表25	脇本遺跡第4次調査出土遺物観察表(3)	82
表26	脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(1)	93
表27	脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(2)	94
表28	脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(3)	95
表29	脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(4)	96
表30	脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(5)	97
表31	脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(6)	98
表32	脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(7)	99
表33	脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(8)	99
表34	脇本遺跡第6次調査出土遺物観察表(1)	106
表35	脇本遺跡第6次調査出土遺物観察表(2)	107
表36	脇本遺跡第7次調査出土遺物観察表(1)	113
表37	脇本遺跡第7次調査出土遺物観察表(2)	114

図 版 目 次

巻頭図版1

脇本遺跡 遠景(南西より)

脇本遺跡 第4次調査 SB4002(南より)

巻頭図版2

脇本遺跡 第1次調査

SB1001の柱穴掘形と柱痕跡(南東より)

脇本遺跡 第3次調査 SA3001(東より)		春日神社 (南より)	
		第3・4次調査区 (東南より)	
図版1	空からみた脇本遺跡 遺跡遠景 (西上空より) 第4次調査の検出遺構 (上が東)	図版10	脇本遺跡 第一次調査 (燈明田地区) 調査区全景と外鎌山 (北より) 調査区全景 (南より)
図版2	朝倉小学校地内の調査 (第一次調査) 体育館建設予定地の調査区南半 (東より) 体育館建設予定地の調査区 石溝SD1001 (北より)	図版11	脇本遺跡 第一次調査 土器埋納土坑SK1002と 焼土坑SK1001 (北東より) 検出遺構全景 (南より)
図版3	朝倉小学校地内の調査 (第一次調査) 体育館建設予定地内の調査区 石溝SD1001 (東より) 体育館建設予定地内の調査区 石溝SD1001 (西より)	図版12	脇本遺跡 第一次調査 掘立柱建物SB1002北東隅柱穴掘形 (西より) 掘立柱建物SB1001の柱穴掘形と柱痕跡 (西辺の南から2番目) (南東より)
図版4	朝倉小学校地内の調査 (第一次調査) 体育館建設予定地内 石溝SD1001 (西より) 体育館建設予定地内 石溝SD1001調査区東端 (西より)	図版13	脇本遺跡 第一次調査 大規模な整地層と下に掘られた溝 SD2001 (南西より) 調査区東壁で検出した壺棺SX1001 (西より)
図版5	朝倉小学校地内の調査 (第一次調査) 石溝SD1001 (北より) 石組みの中に置かれた土器	図版14	脇本遺跡 第一次調査 壺棺SX1001埋葬状態 (西より) 土器埋納土坑SK1002と 焼土坑SK1001 (西より)
図版6	朝倉小学校地内の調査 (第二次調査) プール建設予定地の調査区 柱穴掘形 (布掘り) プール建設予定地の調査区 柱列 SA02の柱穴掘形と柱痕跡 (南より)	図版15	脇本遺跡 第二次調査 調査区遠景 (南上空より) 調査区全景 (上が北)
図版7	朝倉小学校地内の調査 (第二次調査) プール建設予定地内で検出された 遺構群 (上が北)	図版16	脇本遺跡 第二次調査 掘立柱建物SB1001・SB2001 (南より) 掘立柱建物SB2001の柱穴掘形 (西辺の南から3番目) (北より)
図版8	朝倉小学校地内の調査 (第二次調査) プール建設予定地内調査区 (北より)	図版17	脇本遺跡 第二次調査 掘立柱建物SB1001の柱穴掘形(南より) 掘立柱建物SB1001の北辺中央の 柱穴掘形と柱痕跡 (西より)
図版9	脇本遺跡の現状		

- 図版18 脇本遺跡 第二次調査
掘立柱建物SB1001・SB1002と
東西方向の溝SD2001（南より）
東西方向の溝SD2001内遺物出土状況
（東より）
- 図版19 脇本遺跡 第三次調査（苗田地区）
調査前（東より）
中世柱穴群（西より）
- 図版20 脇本遺跡 第三次調査
素掘り溝と掘立柱建物SB3001（東より）
東西柱列SA3001と
掘立柱建物SB3002（西より）
- 図版21 脇本遺跡 第三次調査
東西柱列SA3001と下層遺構（東より）
調査区全景（東西柱列SA3001・掘立柱
建物SB3002と下層のピット群）
（西より）
- 図版22 脇本遺跡 第三次調査
反転して置かれた土師器壺
（南西より）
掘立柱建物SB4002（東南より）
- 図版23 脇本遺跡 第三次調査
調査区遠景（東上空より）
調査区全景（上が東）
- 図版24 脇本遺跡 第三次調査
竪穴建物SI3001内遺物出土状況
（東より）
東西柱列SA3001と竪穴建物SI3001
（東より）
- 図版25 脇本遺跡 第四次調査
調査区全景 表土除去後（東より）
遺構検出中の全景（東より）
- 図版26 脇本遺跡 第四次調査
遺構検出時の状況（西より）
遺構掘り上げ後の状況（西より）
- 図版27 脇本遺跡 第四次調査
近世石組貯水池SK4004（西より）
近世石組貯水池SK4004（南より）
- 図版28 脇本遺跡 第四次調査
調査区全景（東より）
掘立柱建物SB4002と
柱列SA4003（南より）
- 図版29 脇本遺跡 第四次調査
竪穴建物SI4001（北東より）
竪穴建物SI4001西北隅遺物出土状況
（馬歯と反転した土師器）（北より）
- 図版30 脇本遺跡 第四次調査
竪穴建物SI4002遺物出土状況
（南東より）
竪穴建物SI4002遺物出土状況
（西より）
- 図版31 脇本遺跡 第五次調査（宮ノ本地区）(1)
表土除去後（南より）
石垣、溝SX5001と柱列SA5001
（南より）
- 図版32 脇本遺跡 第五次調査
石垣、溝SX5001出土状況（東より）
石垣と礫群（南より）
- 図版33 脇本遺跡 第五次調査
調査区遠景（南上空より）
調査区全景（上が北）
- 図版34 脇本遺跡 第六次調査（宮ノ本地区）(2)
調査区全景（南東より）
掘立柱建物SB6004の柱穴掘形（母屋
西辺の南から6番目）（南東より）
- 図版35 脇本遺跡 第六次調査
竪穴建物SI6005（南東より）
竪穴建物SI6004（南西より）

図版36	脇本遺跡 第六次調査 検出遺構群と春日神社（南西より） 掘立柱建物SB6004・SB6005（東より）	図版51	脇本遺跡 第二次調査出土遺物
図版37	脇本遺跡 第六次調査 調査区遠景（上が北西） 調査区全景（上が東）	図版52	脇本遺跡 第二次調査出土遺物
図版38	脇本遺跡 第六次調査 掘立柱建物SB6001（南より） 掘立柱建物SB6001と下層の竪穴建物 SI6001～6003（南より）	図版53	脇本遺跡 第二次調査出土遺物
図版39	脇本遺跡 第七次調査(宮ノ本地区)(3) 調査区北半部（東より） 調査区全景（南より）	図版54	脇本遺跡 第三次調査出土遺物
図版40	脇本遺跡 第七次調査 遺構検出状況（南より） 礫群出土状態（南東より）	図版55	脇本遺跡 第三次調査出土遺物
図版41	脇本遺跡 第七次調査 竪穴建物SI7001（北より） 土坑SK7001内出土の馬歯と杯 （北東より）	図版56	脇本遺跡 第三次調査出土遺物
図版42	脇本遺跡 第一次調査出土遺物	図版57	脇本遺跡 第三次調査出土遺物
図版43	脇本遺跡 第一次調査出土遺物	図版58	脇本遺跡 第四次調査出土遺物
図版44	脇本遺跡 第一次調査出土遺物	図版59	脇本遺跡 第四次調査出土遺物
図版45	脇本遺跡 第一次調査出土遺物	図版60	脇本遺跡 第四次調査出土遺物
図版46	脇本遺跡 第一次調査出土遺物	図版61	脇本遺跡 第四次調査出土遺物
図版47	脇本遺跡 第一次調査出土遺物	図版62	脇本遺跡 第四次調査出土遺物
図版48	脇本遺跡 第一次調査出土遺物	図版63	脇本遺跡 第五次調査出土遺物
図版49	脇本遺跡 第二次調査出土遺物	図版64	脇本遺跡 第五次調査出土遺物
図版50	脇本遺跡 第二次調査出土遺物	図版68	脇本遺跡 第五次調査出土遺物
		図版65	脇本遺跡 第五次調査出土遺物
		図版66	脇本遺跡 第五次調査出土遺物
		図版67	脇本遺跡 第五次調査出土遺物
		図版68	脇本遺跡 第五次調査出土遺物
		図版69	脇本遺跡 第五次調査出土遺物
		図版70	脇本遺跡 第五次調査出土遺物
		図版71	脇本遺跡 第五次調査出土遺物
		図版72	脇本遺跡 第五次調査出土遺物
		図版73	脇本遺跡 第六次調査出土遺物
		図版74	脇本遺跡 第六次調査出土遺物
		図版75	脇本遺跡 第六次調査出土遺物
		図版76	脇本遺跡 第七次調査出土遺物
		図版77	脇本遺跡 第七次調査出土遺物
		図版78	脇本遺跡 第七次調査出土遺物

第1章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 位置と地理的環境

奈良盆地の西南、葛城山麓から東を眺めれば、秀麗な山容をした三輪山（471.6m）後方に、累々たる山脈が望める。標高300mから400mほどの高原地帯、大和高原である。こうして眺めると、大和高原の西南隅部に三輪山が位置しているのが良くわかる。その南の山塊、龍門山地との間に形成されているのが、初瀬宇陀川断層谷、初瀬谷である。

一見すると、三輪山とその南に対峙する鳥見山（245m）の間が、初瀬谷の入り口のごとく見える。しかし、実際の谷口は、鳥見山の東に聳える外鎌山（229.5m）と三輪山の間である。また三輪山と鳥見山に挟まれた平野部が、西に向かって開いているので、谷はそのまま東に延びているように錯覚するが、正確にいうと谷口から北東に屈曲している。したがって谷の口は南西に向いていることになる。

初瀬谷には、大和高原に源を発する初瀬川（大和川）が流れている。大和高原を南流した川は、初瀬谷で上流の西峠に水源を持つ吉隠川と合流し、谷口で北西に大きく屈曲、三輪山裾から盆地へと流れ出ている。その谷口近くの右岸、標高100m前後の台地に本報告の脇本遺跡が位置している。

初瀬谷を行政区から見れば、谷口から桜井市慈恩寺、脇本、黒崎、出雲の集落と続き、初瀬川と吉隠川の合流点に初瀬の町並みがある。初瀬は長谷寺の門前町として栄えている街である。このあたりから谷幅は狭くなり、東の西峠まで上りとなる。吉隠川に沿って、与喜浦、吉隠、角柄の集落があるが、角柄の行政区は宇陀市となる。また、谷の南の山中には竜谷、下岩坂、上岩坂、狛が所在する。

大阪と名古屋、伊勢方面を結ぶ近畿日本鉄道大阪線は、奈良盆地の南部を東西に走り、初瀬谷を宇陀へとぬけている。

初瀬谷の口に位置する朝倉駅の北が慈恩寺で、初瀬川北岸を通る旧道沿いと三輪山裾に民家が集中している。

朝倉駅の北東山寄りには脇本の集落があり、その東寄りに村社の春日神社がある。この神社は、三輪山から延びた支脈の先端を削り取り、造成したところに建てられている。神社の鳥居前に立てば、外鎌山の山頂が正面に見える。また、西方に目をやれば、葛城・金剛山麓が思いのほか間近に見え、河内へ通じる水越峠をほぼ南西に望むことができる。このような地理的環境の中に脇本遺跡は所在している。

第2節 歴史的環境

初瀬谷の中で最古の遺物として知られるのは、脇本遺跡（1¹⁾の東にある朝倉小学校北隣の畑地で採集された有舌尖頭器である²⁾。現在のところ知られるのは1点だけだが、旧石器時代末期から縄文時代草創期にかけて、この谷に生活したであろう古代人の足跡であることに違いない。ではこの谷が古代

人にとってどのような地であったのか、周辺の遺跡を概観しながら歴史を辿ってみよう。

初瀬谷には、古代、中世において重要な交通路であった初瀬街道（伊勢街道）が通っている。そして、周辺には縄文土器をはじめとして、各時代の遺物を出土する遺跡が点在している。

【縄文・弥生時代】

三輪山の南西麓の標高80メートル前後の台地に、縄文時代前期の土器をはじめとし、弥生、古墳、飛鳥、奈良、平安時代の土器を出土する三輪遺跡（3）がある。遺跡の中心は、大神神社の南約400mにある天理教敷島大教会と三輪小学校あたりと考えられ、東西約500m、南北約400mの広範囲におよんでいる。しかし、遺構についてはまだ明らかにされていない³⁾。

縄文後・晩期の土器をはじめとし、弥生、古墳時代から平安時代の土器などを出土する纏向遺跡（4）は、三輪山西北麓にある⁴⁾。この遺跡は古墳時代初頭の遺跡として著名であるが、ここに縄文後、晩期の土器の出土する事実も、古代史を復元する上で見逃すことはできない。

縄文後期の土器を出土する遺跡は、このほかに鳥見山西麓の河西字居城に所在する河西遺跡（7）がある。ここでは、縄文後期の磨消縄文土器や無紋土器のほか、弥生土器、土師器、須恵器なども出土している。これらは、昭和14年（1939）4月の土砂採掘工事中に発見されたものであり、遺構にと⁵⁾もなったものではない。

上記のほかに弥生土器を出土するのは、脇本遺跡（1）や纏向遺跡の南に隣接する芝遺跡（5）がある⁶⁾。三輪遺跡の南、初瀬川と栗原川に挟まれた東西約1.2km、南北約600mの広範囲には、弥生時代から奈良時代までの遺物が出土する城島遺跡（6）がある⁷⁾。古代の市として『万葉集』にも詠われている「海石榴市」推定地は、この遺跡の北の初瀬川沿いに所在する。

鳥見山と外鎌山の間、忍坂谷を流れる栗原川右岸にも、弥生土器を出土する忍坂遺跡（8）がある。そして、外鎌山の東約1.5kmの山頂に程近い南斜面の標高約320mのところに、弥生時代後期の高地性集落の存在をうかがわせる土器散布地がある⁸⁾。

【古墳時代】

集落遺跡の中で、初期のものとして捉えられる纏向遺跡からは、畿内のみならず畿外から運ばれた土器の出土が少なからず見られる。また弧文円板などのように、文様のルーツを畿外に求めるものも出土し、古墳時代初頭にはすでに各地域との交流が頻繁に行われていたことを裏付けている⁹⁾。このことは、わが国の古代国家成立過程において舞台となった、重要な地域である可能性を示しているといえよう。それは、纏向遺跡に南接してある前期の大型前方後円墳の箸墓古墳（A）の存在からもうかがい知ることができる。

前期の大型前方後円墳は、ほかに鳥見山の北麓の桜井茶臼山古墳（B）や鳥見山南西のメスリ山古墳（C）がある。桜井茶臼山古墳からは碧玉製玉杖が出土しているが、これは被葬者が生前権威のシンボルとして所持していたものと思われる¹⁰⁾。またメスリ山古墳からは多量の武器、武具が出土している¹¹⁾。これらの古墳が、古代宮都の地として『記・紀』に登場する「纏向」、「磯城」、「磐余」の地に存在することは興味深い。

表1 『記』・『紀』に記された桜井周辺の宮名

天皇	古事記	日本書紀
10 崇神	師木水垣宮	磯城瑞籬宮
11 垂仁	師木玉垣宮	纏向珠城宮
12 景行	纏向之日代宮	纏向日代宮
17 履中	伊波礼之若桜宮	磐余稚桜宮
21 雄略	長谷朝倉宮	泊瀬朝倉宮
22 清寧	伊波礼之麁栗宮	磐余麁栗宮
25 武烈	長谷之列木宮	泊瀬列城宮
26 継体	伊波礼之玉穗宮	磐余玉穗宮
29 欽明	師木嶋大宮	磯城嶋金刺宮
31 用明	池辺宮	磐余池辺雙槻宮

ここで「纏向」、「磯城」、「磐余」、「泊瀬」を冠した宮名をあげると表1の10ヶ所になる。脇本遺跡はその中の「泊瀬」のエリア内に所在している。

脇本遺跡についての詳細は後章にゆずるとして話をさきに進めよう。

外鎌山の北西にある忍坂遺跡（8）からも、古墳時代の建物跡が検出されている¹²⁾。忍阪の地が文献に登場するのは、『日本書紀』の神武即位前紀に「汝、大来目部を師いて、大室を忍坂邑に作りて。云々」と記載されているのが最初である。また垂仁紀39年10月の条には五十瓊敷命が作った一千口の剣を、石上神宮の神宝とする以前、坂邑に蔵む、という記事も載る。前述したメスリ山古墳出土の多量の武器類やこれらの記事から、古代においてこの辺りがいかに軍事上重要な地として目されていたかを知ることができよう。

また忍阪には、允恭天皇の皇后の忍坂大中姫の忍坂宮があったとされる。その宮の所在地を具体的に示す史料は、允恭紀2年2月の条の、忍坂大中姫が鬨鶏国造の無礼な言葉つきに対し、姓を稲置におとしたとする説話に見られる。ちなみに忍坂大中姫は、泊瀬朝倉宮に君臨した雄略天皇の母である。

外鎌山の北麓は現在造成され住宅地となっているが、かつて「外鎌山古墳群」と称された古墳群が存在していた。造成が行われるにあたり事前に発掘調査が実施された¹³⁾。古墳群の詳細は調査報告書に詳しいが、その中で初瀬川を挟んだ北側にある脇本遺跡の存在に注目し、遺跡に関わる資料を検討している。そして雄略天皇の泊瀬朝倉宮以降に築造された古墳群として「外鎌山古墳群」の存在を述べている。深くは触れていないが、脇本遺跡と外鎌山古墳群の関係を暗に提示したものと受けとめられる¹⁴⁾。

外鎌山南麓の忍阪の集落はずれには、舒明天皇陵、鏡女王・大伴皇女墓と伝えられる古墳が点在している。舒明陵とされる古墳は、外鎌山から南に延びた丘陵上に築造された古墳であるが、修理記録や地元の古老の話からもその蓋然性は高いと思われる。

【飛鳥・奈良時代】

初瀬谷で最古の寺院跡とされるのは慈恩寺である。現在も地名にその名を残しているが、三輪山南麓の慈恩寺字北山周辺で奈良時代の軒丸瓦を出土することから、この辺りに存在したと思われる（9）。

また東京国立博物館に慈恩寺と朝倉宮出土と伝えられる瓦が所蔵されているが、確かな出土地については不明である。

忍阪には白鳳時代の石造三尊仏が安置されていることで著名な石位寺がある（10）。寺そのものは江戸時代に建立されたものだが、地元の古老の話によると、石造三尊仏は以前舒明陵付近にあったものを寺に運び安置したらしい。

これについて『外鎌山北麓古墳群調査報告書』は、「この石造物を安置する仏堂についての考古学的資料については、現在の石位寺以前のもので得ることはできない」としながら、仏堂もしくは仏寺が舒明陵の墓辺寺的性格を持ったものであった可能性を指摘している¹⁵⁾。

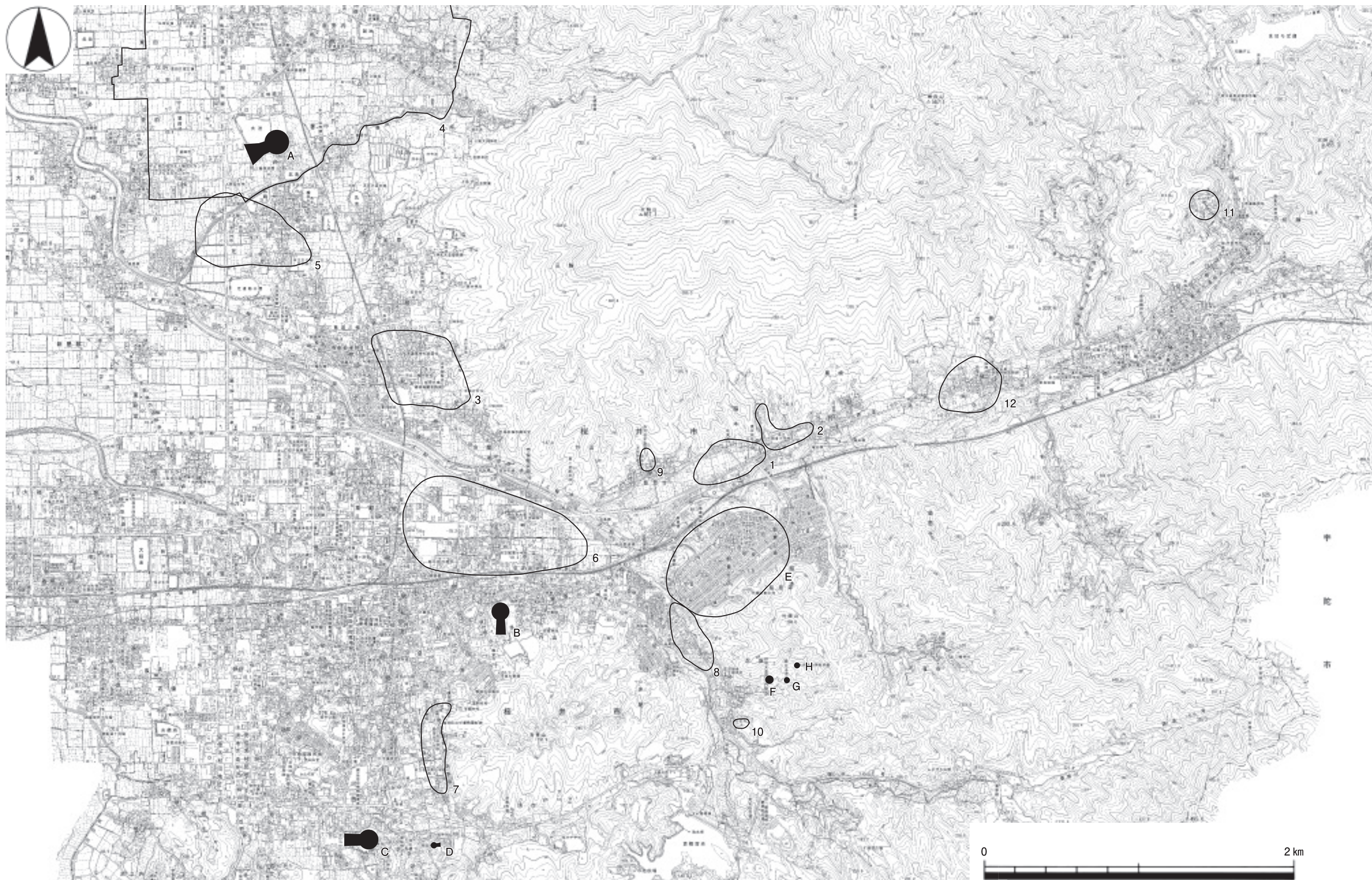
このほかに文献に登場する初瀬谷の歴史を見てみると、『日本書紀』天武2年4月、大来皇女が斎王として伊勢に赴く前、泊瀬斎宮で身を潔めた記事が載る。泊瀬斎宮の所在地についてはまだ明らかになっていない。しかし、初瀬谷が古代において交通の要衝であったことに加え、神に近づくための神聖な場所であったと考えられていたことがわかる。

また天武8年8月紀には、天武天皇が泊瀬に行幸し、「迹^{とどろきのふち}驚淵の上に宴」を催したことが載る。「迹驚淵」を初瀬川の水流の激しい所とするなら、初瀬谷を流れてきた川が三輪山南麓に向けて大きく屈曲する辺り、現在の近鉄朝倉駅付近と考えられようか。

朝倉駅は、昭和19年（1944）に近畿日本鉄道によって新設されたが、その際多量の遺物の出土と石敷きらしい遺構の一部が発見されたことが、当時の新聞に掲載された¹⁶⁾。しかし、この遺跡が天武天皇の行幸した迹驚淵と直接関わるものかどうかはわからない。ただ、文献記事を考古学的に実証できる可能性を十分に持つ所として、今後注目してゆくべき地域といえよう。（玉城）

【註】

- 1) 松本俊吉「朝倉村脇本石器時代遺跡」『磯城』2-1 1939
厚芝保一・辻本好孝・土井実・松本俊吉「朝倉村出土遺物について」『磯城』2-5 1939
黒崎小学校「朝倉村灯明田遺跡について」『磯城』2-5 1939
- 2) 前園実知雄・関川尚功「歴史的環境」『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第34冊 1978
- 3) 樋口清之「三輪遺跡とその遺物の研究」『大和石器時代研究』1934
樋口清之「三輪山文化の研究」『古代文化』4 1926
- 4) 石野博信・関川尚功『纏向』1976
- 5) 辻本好孝「等彌神社南方接統地出土土器」『磯城』5-1 1942
- 6) (註3)に同じ
- 7) 桜井市教育委員会『桜井市外山下田発掘調査報告書』1984
- 8) (註2)に同じ
- 9) (註3)に同じ
- 10) 中村春寿・上田宏範『桜井茶臼山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第19冊 1961
- 11) 伊達宗泰ほか『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第35冊 1977
- 12) 奈良県立橿原考古学研究所『忍阪遺跡発掘調査概報』1987
- 13) (註2)に同じ
- 14) (註2)に同じ
- 15) (註2)に同じ
- 16) 大阪朝日新聞 昭和19年10月14日・11月1日付の記事



1. 脇本遺跡 2. 朝倉遺跡 3. 三輪遺跡 4. 纏向遺跡 5. 芝遺跡 6. 城島遺跡 7. 河西遺跡 8. 忍坂遺跡 9. 慈恩寺跡 10. 石位寺 11. 長谷寺 12. 出雲遺跡
A 箸墓古墳 B 桜井茶臼山古墳 C メスリ山古墳 D 兜塚古墳 E 外鎌山北麓古墳群 F 舒明天皇陵 G 鏡女王墓 H 大伴皇女墓

図1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第2章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機

桜井市脇本遺跡は、現在の国道165号線の前身である、桜井と初瀬間の県道を新設するにあたって数多くの遺物が出土したことにより、昭和14年（1939）頃学界の注目を浴びるようになった遺跡である¹⁾。縄文・弥生・古墳・飛鳥・奈良時代の遺物の多くは、黒崎にある朝倉小学校に保管されていたが、昭和47年（1972）～51年（1976）に実施した外鎌山北麓古墳群の発掘調査の報告書作成時に、再び詳細な調査を行った²⁾。この遺物の検討からは、脇本遺跡はいわゆる歴代遺跡であることが再確認されたが、なかでも古墳時代前期から中期の土器が特に目を引いた。ただ残念ながら遺構に伴うものではなく、また大部分が小破片であることから詳しい検討は将来の発掘調査にゆだねるしかなかった。

脇本は地理的に見れば、奈良盆地から東国へ向かう道の出口部に当たり、また初瀬川にも面した交通の要衝の地である。歴史的には『記・紀』・『万葉集』をはじめとする古代の文献に記された雄略天皇泊瀬朝倉宮、武烈天皇泊瀬列城宮などの存在が予想されている地域でもある。

そのような状況の中で、昭和56年（1981）7月から12月の期間、桜井市教育委員会によって朝倉小学校体育館建設に先立つ事前発掘調査が実施された。その結果、6世紀前半と見られる石組みの溝や土坑が検出され注目を浴びることになった。さらに昭和58年（1983）には体育館の南にプールが新設されることになり、その事前調査でも柱穴掘形や多くの遺物が出土した。

初瀬谷の中には、黒崎、岩坂、出雲の地に宮跡の伝承地が残っているが、いずれもまだ考古学的には検証されてはいず、また地形的にも適しているかどうか疑わしい点もあり、不確定としかいえない。そういった中で、この2次の調査で朝倉小学校校庭から検出された遺構群は、詳しい時期決定はさらに検討を必要とするが、6世紀の重要な遺跡としてこの宮跡地論争の一角に加わることになった。

この調査を契機として、磯城・磐余についての総合的な調査、研究を始めていた³⁾檀原考古学研究所と桜井市が中心となり、昭和59年（1984）2月に「磯城・磐余の諸宮調査会」（池田栄三郎会長）が結成された。この調査会は、『記・紀』に記された諸宮の中で飛鳥時代以前の宮が主として現在の桜井市東南部から檀原市にかけての磯城、磐余地方に多く営まれていることを重視し、その解明と保存を目指そうということで始まった。発足時の調査会の構成は下記の通りある。

会 長	池田 栄三郎	桜井市長
副会長	岸 俊男	檀原考古学研究所長
理 事	直木 孝次郎	岡山大学教授
同	秋山 日出雄	神戸女子大学教授
同	網干 善教	関西大学教授
同	森 浩一	同志社大学教授
同	石野 博信	檀原考古学研究所研究部長

同	和田 萃	京都教育大学助教授
同	狩田 秀太郎	桜井市助役
同	長谷川 明	桜井市収入役
同	外嶋 尚春	桜井市教育委員会教育長
同	萩原 儀征	桜井市教育委員会社会教育課文化財係長
調査委員長	石野 博信	
調査委員	泉森 皎	橿原考古学研究所調査課長
同	菅谷 文則	橿原考古学研究所主任研究員
同	千田 稔	奈良女子大学助教授
同	和田 萃	
同	河上 邦彦	橿原考古学研究所主任研究員
同	萩原 儀征	

（肩書きはすべて当時のもの。敬称略）

事務局は桜井市教育委員会社会教育課に設置した。調査会にはその後調査委員として前園実知雄（橿原考古学研究所主任研究員）、清水真一（桜井市教育委員会社会教育課文化財係）が加わり、副会長は岸俊男氏の逝去の後空位であったが、平成元年度（1989）から樋口隆康氏（橿原考古学研究所長）が、また教育長の異動により、理事の外嶋尚春氏の後任には南正直氏が就かれた。

【註記】

- 1) 松本俊吉「朝倉村脇本石器時代遺跡」『磯城』2-1 1939 ほか
- 2) 前園実知雄・関川尚功「歴史的環境」『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第34冊 1978
- 3) 『考古学論攷』橿原考古学研究所紀要 第6冊 1981

第2節 調査の経過

「磯城・磐余の諸宮調査会」の発掘調査としては、燈明田地区で昭和59年（1984）4月23日に開始した脇本遺跡第1次調査が最初であるが、ここではそれ以前に桜井市教育委員会が実施した朝倉小学校地区の2次にわたる調査についても報告を行う。

まず朝倉小学校地内の第1次調査は、体育館建設にともなう事前調査で、昭和56年（1981）7月末日から12月末まで実施した。学校北側の斜面および谷間の水田に12ヶ所のトレンチを設定し、延べ約500㎡の範囲についての調査を行った。

その結果、体育館建設の予定地である水田の耕作土直下から石積みの溝が検出された。周辺部からは6世紀初頭の須恵器が出土することから、調査区を拡大し石溝を追及することにした。調査区範囲は、この石溝を中心に24m×36mの広さで、約900㎡の面積になった。

石溝は現存長約35m、幅約1.5m、深さ40～50cmの素掘り溝の内側に、自然石を2～3段積み重ねたもので、内法の幅は約40cmを測る。出土遺物から見て、6世紀初頭から6世紀末まで機能していたのではないかと考えられる。

第2次調査は、第1次調査区の南約50mの地で旧校舎を撤去した跡地にプールを建設することになり、その事前調査として昭和58年（1983）4月14日～7月27日まで発掘調査を実施した。調査区域はプールおよびその付属施設を含む南北約35m、東西約20mの計700㎡の南北に長い長方形の範囲である。

この2次の調査と「磯城・磐余諸宮調査会」発足以降の調査一覧は以下の通りである（表2）。

表2 脇本遺跡・朝倉小学校地内の調査一覧

次数	地区	期間	面積	担当者
朝倉1次	朝倉小学校	昭和56.7～12	900㎡	萩原儀征・村社仁史
朝倉2次	朝倉小学校	昭和58.4.14～7.27	700㎡	萩原
脇本1次	燈明田地区	昭和59.4.23～6.16	100㎡	萩原・前園実知雄
脇本2次	燈明田地区	昭和60.2.20～4.23	164㎡	前園・清水真一
脇本3次	苗田地区	昭和60.12.9～61.2.22	210㎡	前園・清水
脇本4次	苗田地区	昭和61.11.6～62.1.24	250㎡	前園・清水
脇本5次	宮ノ本地区	昭和63.2.4～4.20	285㎡	前園・清水・橋詰清孝
脇本6次	宮ノ本地区	平成元.1.7～3.25	300㎡	前園・清水
脇本7次	宮ノ本地区	平成元.11.18～2.1.20	230㎡	清水

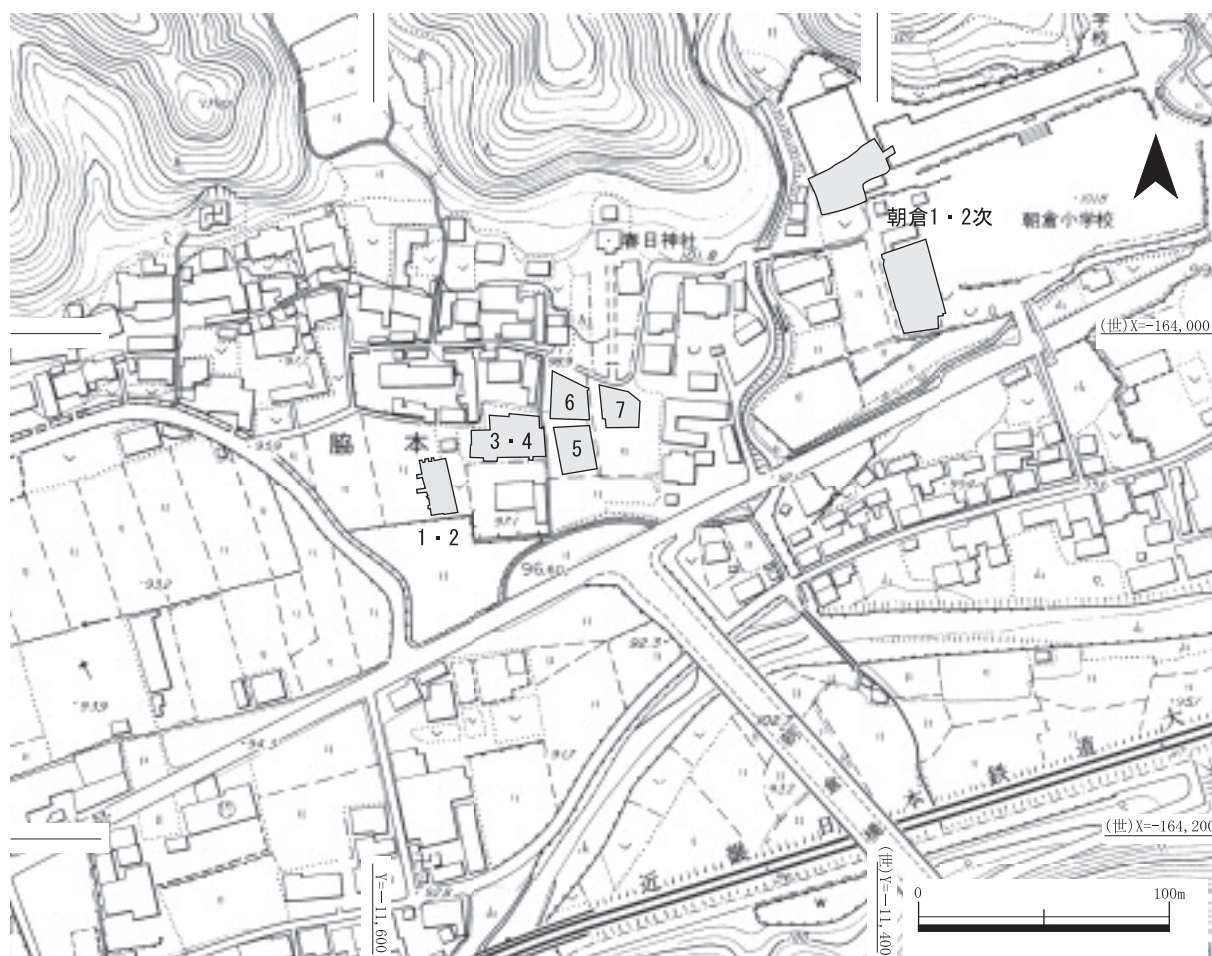


図2 脇本遺跡・朝倉小学校地内の調査 トレンチ配置図（1/3,000）

第3節 調査日誌抄

【脇本遺跡第1次調査】

（昭和59年（1984）4月23日） 本日から脇本・燈明田遺跡の調査を開始。この遺跡は、昭和14年（1939）2月2日に県道改修工事にともなう土砂採取の際発見されたもので、弥生、土師、須恵器が多量に出土している。今回、磯城・磐余の宮跡の調査の一環として、雄略天皇泊瀬朝倉宮の可能性を秘めた地点として調査対象地となった。調査は先の遺物出土地に北接するところに、5×20mの南北トレンチを設定して開始した。また調査区をさらに5mごとに地区割りし、北から南に向かってA～D区とする。

（4月24日） 表土除去終了。耕作土下の赤褐色土層を除くと、礫を多く含む土層が現れる。赤褐色土層からは散在的に古墳時代の土師器、須恵器片、奈良時代の須恵器片、中世陶器片などが出土。

（4月25日） 第2層の赤褐色土層を掘り進む。弥生土器～近世陶器片まで出土。

（4月26日） 第3層の暗褐色土層を掘り進む。土師器、須恵器片が混じる。

（4月27日） 第3層を掘る。古墳時代の土器片が多い。昭和14年（1939）の土器出土の状況を見学していた人の話では、土器は1.6mくらい下から一括して出土したらしい。

（4月28日） トレンチ全体から見れば、暗褐色の礫層は北側が薄く、南に行くにしたがって厚くなる。現在のところこの礫層を人為的なものとは見ていないが、しっかりした砂質土は北が高く、南に行くにしたがって深くなることから、何らかの遺構がこれをベースにしたものであれば、礫層は整地土とも考えられる。土器（土師器、須恵器）片は礫層と暗褐色土に含まれるが、いずれも古墳時代（5～6世紀）のもの。

（5月1日） 礫を多く含む灰黒褐色土層（第4層）を切って、トレンチ内に斜めにほぼ南北に3本の細い溝を検出。

（5月2日） 溝を掘り始める。

（5月7日） 溝を掘りあげる。暗褐色土の下のにさらに礫を多く含む灰黒褐色土層は、トレンチ中央部から始まり、南に行くにしたがって厚くなる。この中に土師器、須恵器片、木炭片が含まれている。

（5月8日） 灰黒褐色土層を掘り下げる。土師器片が多く、須恵器片も若干混じる。顕著な遺構はまだ検出されない。

（5月9日） 灰黒褐色土をトレンチ南端から北に向かって掘り進める。D区の東側で花崗岩の自然石が2個、置かれた状態で出土した。同じくD区の西側では焼土坑（SK1001）と土師器甕2個（SK1002）が埋まった状態で検出された。C区南端では帯状に東西に小礫の散らばりが見られる。灰黒褐色土層から出土する土器は古墳時代前期のものが多いが、中期の須恵器片もわずかであるが含まれる。

（5月10日） 灰黒褐色土層を南から北に向かって取り外す。C～D区あたりから北には砂利は少なく砂質土となるが、土層中には古墳時代前期の土器が最も多い。しかし、縄文、須恵器片も含まれていることから、古墳時代中期以降の整地土と見て良い。昨日検出したC区の小礫の広がりはいまだ整然

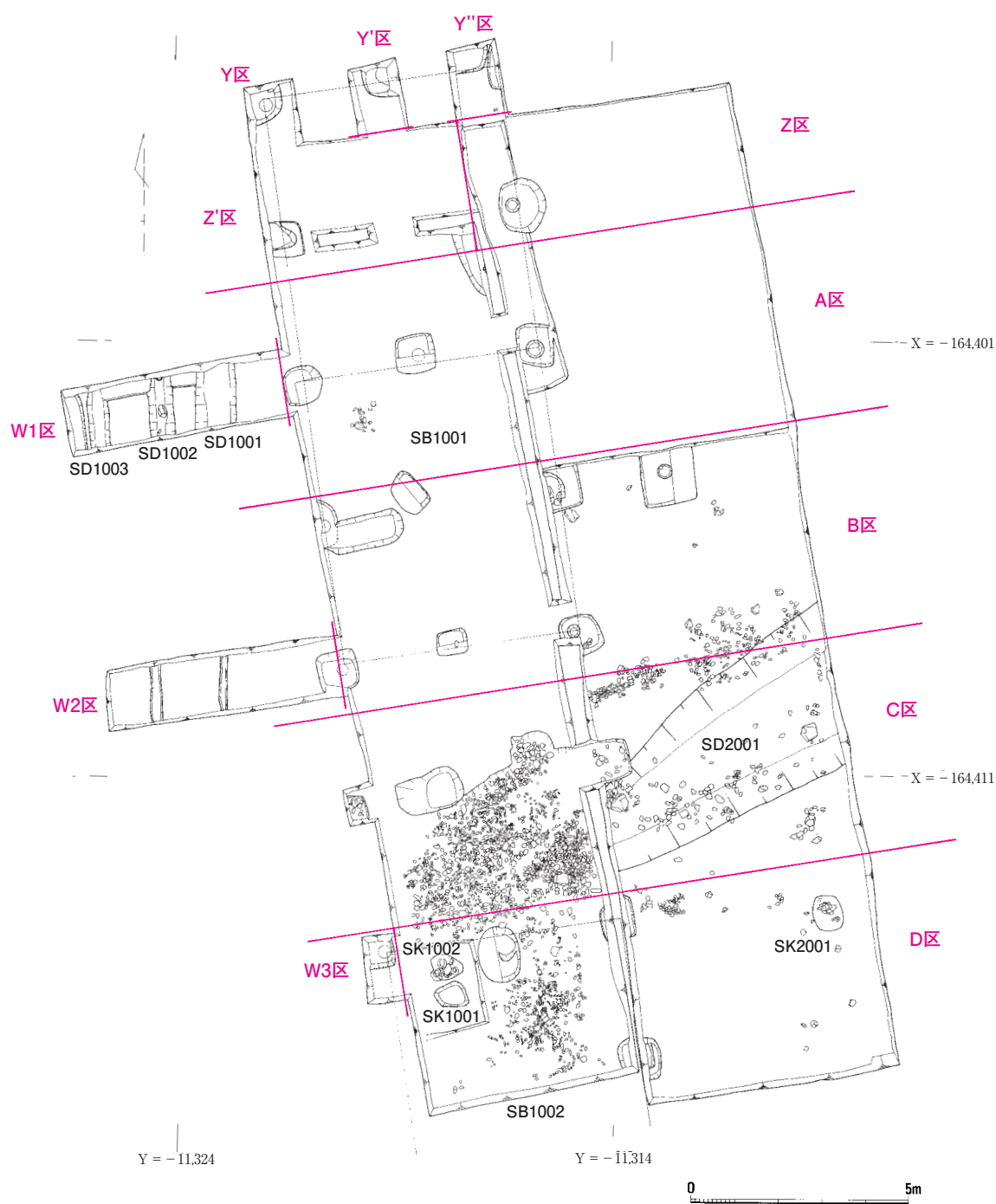


図3 脇本遺跡第1・2次調査 地区割図 (1/150)

としたものではないが、両側にやや太目の石が見られ、幅約1.5mで東西に帯状に広がっている。

(5月11～14日) 灰黒褐色土層を掘る。

(5月15日) 灰黒褐色土層を掘り上げ、トレンチ全面の清掃。

(5月16日) トレンチ内の清掃。A区西壁に沿って柱穴状の土坑を2つ確認。

(5月17日) トレンチ内の水換え作業。

(5月18日) D区の掘り下げと柱穴検出のため全面を削る。

(5月19日) A、B区のトレンチ西壁に接して南北に3個の柱穴を確認。

(5月21日) D区の掘り下げと、柱穴の掘り込まれた面を検討するためトレンチの壁面を削る。その結果、柱穴は赤褐色土層の下に暗灰褐色土層を切って掘り込まれていることを確認。この層には古墳時代前期、中期の土器が含まれることから、柱の上限は古墳時代中期末と見られる。柱穴の方位はほぼ磁北。トレンチ中央でも南北に2個の柱穴掘形を検出。柱穴掘形の規模は一辺90cmと70cmの2種類。橿原考古学研究所15名余りで現地検討会を行う。

(5月22日) トレンチを柱通りに合わせて2ヶ所東に拡張する。その結果予想通り柱穴掘形を検出。南北二間(柱間3.3m)、東西二間以上(柱間2.7m)の東西棟の可能性がある(SB1001)。

(5月23日) D区のSK1001・SK1002を掘る。SK1001の焼土坑は赤く焼け、強い熱を受けている。SK1002にはほぼ完形に近い土師器甕3個が、中央の石を囲んで逆さまに埋められている。

(5月24日) 断面観察のためトレンチ北西角を掘り下げると、柱穴掘形の一部が現れたため拡張する。同時に東側部分を拡げるが、柱穴掘形はない。

(5月25日) 写真撮影。

(5月26日) 実測用の杭打ち。断面観察のためD区の東南角を掘り下げると、柱穴掘形の一部(SB1002)を検出。

(5月30日) 実測用の杭打ち。午後、岸俊男所長来られ2時間余り断面の検討。先の観察時に柱穴は暗褐色土層を切って掘り込まれていたと判断していたが、柱穴掘形の上面は下層の灰黒褐色土層で止まっていることが確認された。その結果柱穴の下限が6世紀初頭を下らないことが明らかになった。

(5月31日) 早朝から磯城・磐余諸宮調査会会長も務める池田栄三郎桜井市長来訪。C区で柱穴を確認するためにさらに一部トレンチを拡張する。予想通り柱穴掘形を検出。この結果、建物は南北に柱筋を通す2棟のものであることが判った。夕刻研究所に戻り、明日の発表の資料作りを行う。

(6月1日) 昨日検出した柱穴掘形を掘り下げる。昼過ぎ調査会の石野博信、泉森皎、菅谷文則、河上邦彦委員を加えて検討を行う。遺跡名は「脇本遺跡」とし、今回の調査地は「燈明田地区」とする。午後2時、池田会長立会いのもと記者発表を現地において行う。

(6月2日) 早朝6時30分に現地に着くが、すでに見学者の姿があった。8時前に現場からNHKのニュースワイド中継。桜井市教育委員会の方々、見学者のルート作りや交通整理を行ってくれる。1日の見学者は約1000名。午後7時30分現地を離れる。

(6月3日) ほぼ一日見学者の対応。

(6月4日) 実測作業再開。研究所から実測の応援メンバーが来てくれる。SK1002の遺物出土状態の写真撮影を終え、土器を取り上げる。

(6月5日) 実測作業。見学者は多い。

(6月6日) B・C区の東壁部分で柱穴確認のためトレンチを拡張。実測作業も続ける。

(6月7日) B区の拡張区で柱穴検出。実測作業。

(6月8日) 実測作業。

（6月9日） C・D区にかけての砂利、礫層を東の壁面に沿って掘り下げる。ちょうど地山と整地土の境界地に、握りこぶし大の礫を充填した暗渠が作られていることを確認。

（6月10日） 実測作業。

（6月11日） 実測作業。春日神社境内に基準杭を打つ。

（6月12日） 埋め戻し作業。

（6月14日） N H K 奈良放送局で「脇本遺跡発掘の舞台裏」という番組を制作。

（6月15日） 埋め戻し作業。

（6月16日） 埋め戻し作業。本日で調査はすべて終了。

【脇本遺跡第2次調査】

（昭和60年（1985）2月20日） 本日から調査開始。プレハブの調査事務所と道作り。調査は第1次調査区の東に拡張する形でトレンチを設定。

（2月21・22日） 表土除去作業。

（2月23日） 床土除去作業。出土遺物には近・現代の土器片に混じって古墳時代のものも見られる。

（2月25日） 床土除去作業。古墳時代の土師器、須恵器片が出土し始めるが、中に6世紀後半から7世紀にかけての杯片も少量含まれている。

（2月26日） 第3層（暗灰褐色土）を掘る。春日神社境内を踏査。古墳時代の土器片が目立つ。

（2月27日） 第3層を掘り進める。

（3月2日） 2日間雨が続いたため作業は少し後れる。朝から表面を削る作業。調査区北端近くで柱穴掘形を複数検出（SB2001）。柱間は2.4m。

（3月4日） 検出した柱穴の周辺から出土する須恵器杯片、土師器甗片などに7世紀後半のものが目立つ。柱穴列の方位はほぼ真北を示し、第1次調査で検出した柱穴群が磁北を指すのとはことなる。トレンチ中央部分から南では、暗灰褐色砂質土層の下は礫を多く含む土層となるが、これも第1次調査区に共通する。

（3月5日） 第1次調査で検出した建物（SB1001）の北端確認のため、トレンチの北西部（Y区）を拡張するが、予想通り柱穴を検出する。柱穴の上層には東西方向の素掘り溝があり、6世紀後半の須恵器が出土。さらに柱穴掘形内から古式須恵器の短頸壺片が出土した。

（3月6日） トレンチ中央部から南で柱穴の確認作業。

（3月7日） SB1001とSB2001の前後関係を確認するため平面、断面で検討作業を重ねる。

（3月10日） 日曜日ではあるが、見学者があるため現地で遺物整理を行う。

（3月11日） SB1001の北端を確認するため、5日に検出した柱穴の東でさらに2ヶ所トレンチを拡張（Y'区、Y''区）。

（3月13日） トレンチ北側に入れた拡張区でそれぞれ柱穴を検出。

（3月15日） 第1次調査区の西に東西トレンチ（5×1.5m）2本を南北に入れる（W1区、W2区）。

- (3月16日) 実測用遣り方打ち。
- (3月18日) 東西トレンチで南北方向の溝状の遺構を検出。トレンチ南西隅部を拡張し柱穴を検出。
- (3月20日) SB2001の柱穴掘形を掘り下げる。
- (3月22日) 平板測量(1/100)、遣り方実測(1/20)を開始。
- (3月23日) トレンチ全体の壁面を削り、土層の観察。平板測量終了。
- (3月24日) 西側に入れた東西トレンチ内の柱穴掘形を掘り上げる。底部に径約30cmの柱痕跡が鮮やかに青く残っている。柱の底は柱穴掘形検出面から160cmと深い。
- (3月25日) 航空写真撮影。午後2時から記者発表。
- (3月28日) 久しぶりの快晴。SB2001の柱穴掘形で柱痕跡を探す作業。東壁に沿って70cmの幅で南北に掘り下げる。壁面実測開始。
- (3月29日) トレンチ東端部を掘り下げる。SB1001の検出面から下の整地土内からは須恵器片は全く出土せず、縄文、弥生、土師器片のみである。この建物群の開始時期を示しているのであろう。
- (3月30日) トレンチ北端のSB1001の柱穴掘形の柱痕跡探し。表土下130cmのところから、径30cm余の痕跡を検出。トレンチ東壁に沿ってさらに南に向かって掘り下げる。第1次調査で検出した礫を充填した暗渠部分の続きも掘り上げる。
- (3月31日) 4月7日に予定している現地説明会の案内状作り。
- (4月1日) 新たにSB1002の西北隅の柱穴を探すためトレンチを拡張。予想通り柱穴検出。
- (4月2日) トレンチ四壁の実測作業。
- (4月3日) 遺構写真撮影と断面実測作業。
- (4月6日) トレンチ内の清掃と説明会資料の準備。
- (4月7日) あいにくの曇り空で昼前から雨。午前中の見学者100名余り。午後2時から桜井市役所会議室で2度にわたって説明会を開く。参加者は約150名。
- (4月8日) 遺構写真撮影。
- (4月9日) 遺構埋め戻し用の砂を運搬。柱穴から埋め戻し開始。
- (4月10～25日) 埋め戻しと田起こし作業。

【協本遺跡第3次調査】

- (昭和60年(1985)12月9日) 5×30mの東西トレンチを設定。東端部のみ北に5m拡張し調査を開始。西から5mごとに1～7区と地区設定を行う。
- (12月10日) 表土の半分(75m³)を掘り上げる。
- (12月11日) 東北部から掘り始め、第2層を除去する。北端(7区)で5世紀代の須恵器を出土するピット状の遺構を検出。
- (12月12日) 4～6区の第2層を掘り下げる。全体的に北側に遺物が多く南側が少ない状況にある。
- (12月13日) 2・3区の第2層を掘り下げる。前日と同様この地区でも北側で遺物が多く見られる。

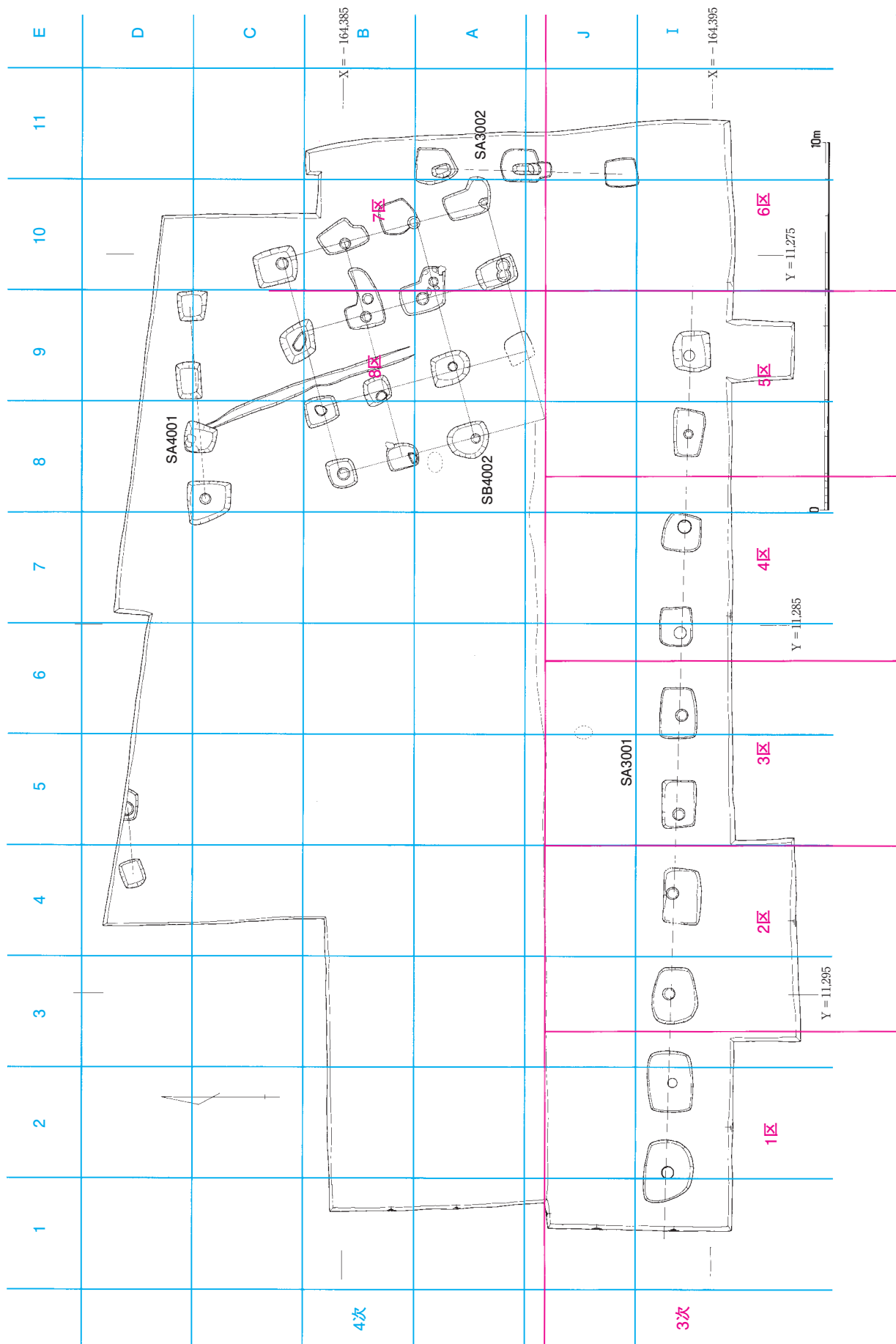


図4 脳本遺跡第3・4次調査 地区割図 (1/150)

(12月14日) 1区の第2層を掘り上げる。奈良時代の土器片がかたまって出土。

(12月16日) 6・7区の第3層を掘り下げる。7区北側で古い須恵器の出土面は認められるが、平坦ではない。

(12月17日) 5～7区の第3層を掘り下げる。7区で中世素掘り溝を検出

(12月18日) 1～3区の第3層を掘り進む。5世紀代の土師器、須恵器片が多量に出土するが、1～2区のトレンチ南半部に多い黒色土層には、土師器皿、黒色土器片が含まれている。またトレンチ北半部に若干残る灰色の第2層からは、近世以降の陶器片も出土する。大規模な客土が考えられるが、奈良時代以前の遺構は少なくとも1～3区では、さらに下層にその存在が予想される。

(12月19日) 全面を削り遺構検出作業。6・7区で中世素掘り溝、土坑を検出したほか、1～3区で東西方向の溝を確認した。

(12月20日) 6・7区の第4層（黒褐色土層）面の遺構検出。7区で2～3ヶ所土坑は見られるが、整然とは並ばない。

(12月21日) 2～6区の第4層を掘る。相変わらず5世紀後半の須恵器、土師器片が多い。2・3区で黒色土の入った小ピットが並ぶ。小規模な建物の跡か。7区で昨日検出した土坑は柱穴掘形の可能性が高い。

(12月23日) 1・2区の第4層を掘り上げる。1～6区の遺構検出作業。

(12月24日) 1・7区の土坑、ピット、溝を掘る。1～7区の遺構には古い時期のものも含まれているが、ほかには黒色土器、瓦器の時期のもの。一×四間の東西棟（SB3001）の掘立柱建物も検出。

(12月25日) 1・4区で検出された建物、ピット群の撮影。SB3001は内部の出土遺物から見て、平安時代後期以降の建物と考えられる。

(12月26日) 今年の調査最終日のため遺構面を保護し、年末年始の休みに備える。

(昭和61年（1986）1月8日) 新年の仕事開始。4・5区の第5層を掘る。トレンチの東にゆくにしたらって旧地形は高くなってゆくようである。5世紀代の土器が多い。

(1月9日) トレンチ全面の清掃。1～5区のトレンチ中央南より九間分、22.5mの間に柱穴掘形を検出（SA3001）。柱間はすべて均等ではないが、おおむね240cm。掘形は大形で一辺120～140cm。黄色土が掘形内に含まれており、第2次調査で検出した上層遺構に対応するものと見られる。

(1月10・12日) 実測作業。

(1月13日) 柱列の全景写真撮影。

(1月14日) トレンチの北半分を幅2mで深さ25cmほど掘り下げる。

(1月16日) 東西方向の柱列に対応する柱の存在を確認するため、部分的に南に拡張し追求するが、痕跡は検出できない。さらに北側の掘り下げ部分にも対応する柱跡は認められない。

(1月17日) SA3001の柱穴掘形は大きいがそれほど整ったものではなく、大きさ、方向にもばらつきがある。確認した柱痕跡は径25cm前後。1区の第7層を掘り下げる。この層からは土師器片の出土を見るだけで、須恵器は混じらない。

(1月18日) 1区を掘り下げると、西端部で土師器壺を中心に、木炭、焼土が現れる。7区ではSA3001とは時期のことなる柱穴を次々と検出。夕方全景写真撮影。

(1月21・23日) 実測作業。

(1月24・25日) 実測作業。

(1月27日) 実測作業。土器洗浄。

(1月28日) 1区の西に2×5mの範囲でトレンチを拡張(1'区)。第3層まで掘る。2区の南でも2×5mの範囲でトレンチを拡張(2区南拡張区)。ここでは第4層の黒色土層に黒色土器が含まれていることが明らかなので、そこまで掘り下げる

(1月29日) 7区の拡張部で下層の柱穴掘形を検出。トレンチ内の200分の1の平板実測を行う。

(1月30日) 7区の北に1m幅でトレンチを拡張し柱穴の検出を目指す。

(1月31日) 7区の北の拡張区からは予想通り柱穴が現れる。この建物に関わる柱穴11個検出。すべてを検出していないため正確な柱間は明らかでないが、7～8尺間隔の総柱建物の可能性が強い。三間×三間以上。2区の南拡張区には柱穴は存在しないようである。しかし、第4層の下から飛鳥～奈良時代の土師器片数片を検出した。またSA3001の掘形の1つから飛鳥時代の甕片が出土。柱列の時期は、7世紀後半以降と見て良さそうである。

(2月1日) SA3001の柱列をすべて掘り上げる。柱通りは一直線であるが柱間は等間隔ではない。

(2月3日) 7区の下層遺構の柱穴の検出作業。トレンチ北東隅に柱穴は存在しないことを確認。清掃を行い、全景と7・8区の建物(SB3003)の写真撮影。

(2月4日) 実測作業。

(2月5日) 実測作業。研究所で発表資料の作成。市長、助役に調査状況の説明。夜に桜井記者クラブで談話会「5、6世紀の豪族屋敷」(石野博信)、「雄略天皇の時代」(前園実知雄)。

(2月6日) 記者発表。

(2月7日) 説明会に向けてトレンチ周辺の整備。航空写真撮影。

(2月8日) 遺物洗浄作業。

(2月9日) 午後、朝倉小学校体育館で説明会。参加者約600名。現地は午前、午後にわたって自由見学。

(2月10日) 1区の第5層をさらに掘り下げる。

(2月11日) 祭日のため作業は行わないが、見学者に便宜を図るため現地は開放。

(2月12日) 1区の第5層を掘り下げる。

(2月13日) 1区の下層遺構(布留期)を検出するため、さらに第5層を掘る。SA3001の柱穴に一部壊されているが、まとまって土器群が出土。中心部はトレンチの西外側になるが、住居跡と見られる(SI3001)。第1、2次調査区でも表土下1m前後で布留期の遺構面が確認されているが、今回の調査でさらに再確認された。昭和13年(1938)の脇本燈明田遺跡の調査資料の中にも、今回の第1～3次調査の資料でもこの時期の遺物の占める割合が最も多い。脇本の集落の中心近くにこの時期の大き

い集落が存在していたと見てよからう。

(2月14日) 作業を始めるがまもなく雨のため中止。終日土器洗い。午後3時過ぎ、脇本の東の集落である出雲の山岡区長、栄長氏らに案内され野見宿禰塚、十二柱神社をはじめ出雲の集落の北の尾根などを踏査。5～6世紀代の須恵器片、中世の瓦器片を多く採集。十二柱神社境内では6世紀代の須恵器片も採集する。この境内も脇本の春日神社と同様に北から南に向かって延びる尾根の先端部を大きく削り取っている。武烈天皇泊瀬列城宮の伝承もあながち無視できないとの印象をもった。

(2月15日) 1区の下層遺構の写真撮影と実測作業。

(2月16日) 日曜日ではあるが現場を公開。見学者30数名。

(2月17日) 1区の遺物出土状態の実測、遺物の取り上げ。トレンチ北壁に沿って幅60cmで掘り下げる。一部柱穴が現れる。7区のSA3002よりさらに下層の可能性がある。

(2月18日) 土器洗浄。

(2月19日) 遺構面の清掃。壁面の写真撮影と実測。トレンチ東端近くで6世紀後半の須恵器片出土。付近の土層が注意される。午後、埋め戻しのための砂搬入。

(2月20日) 1区の断面観察のためにさらに掘り下げる。SI3001の遺構面の下30cmにも焼土層があり、生活面の存在することが明らかになった。さらに下層からも土師器片は少量ではあるが出土する。最下層の粘土層は遺物を含まないが、すぐ上層の砂層から縄文土器片が出土。

(2月21日) 壁面の実測作業。3区北側で検出した柱列(SA3003)の写真撮影と実測。

(2月22日) 埋め戻し作業。

【脇本遺跡第4次調査】

(昭和61年(1986)11月6日) 第3次調査区の北に接して調査区を設定。調査面積は約250㎡。調査区を西から3mごとに区画し1～9区を設定し、北に向かってはA・B区とした。

(11月7日) 表土、耕作土の掘り下げ。座標点の移動。

(11月8日) 床土の掘上げ完了。トレンチの西から第2層を掘り始める。

(11月10日) 第2層を3分の1掘り上げる。

(11月11日) トレンチ中央部の第2層を掘る。溝や土坑を検出するが新しいものが多い。中央部南側部分では、初期須恵器や双孔円板が出土する。

(11月12日) 第2層掘り上げ完了。初期須恵器、韓式土器と見られるもの、製塩土器も出土。調査区内の地形は、北東側が高く南西側が低くなっている。

(11月13日) 第2層除去後の全体写真撮影。C区で東西方向に2条の素掘り溝を検出する。4C区を中心に石だまりがあり近世の瓦が多く見られる。

(11月14日) 第2層面で検出した石だまりの写真撮影と実測。トレンチ北側で土坑を検出するが、新しいもの。

(11月15日) C・D区の新しい遺構の実測。A・B・C区の第3層を掘る。須恵器、土師器、製塩

土器片が混じる。

(11月17日) 第3層を掘る。C・D区で柱穴掘形を検出。

(11月18日) 第3層を全面掘り上げ西側から表面を削り遺構検出作業にかかる。西側の1A・1B・2A・2B区では堆積土がやや多く黄色ブロック土が混じる部分が多い。この面でも南西部が低くなっていることがわかる。4B区付近で出土する須恵器、土師器の写真撮影と出土状態の実測図作製。

(11月19日) 第3層を掘り下げると7C・7D・8D・9D区で東西方向に4個の柱穴掘形(SA4001)を検出。

(11月20日) 4C区の石榴りの掘り下げを行う。西壁に接して1.5×0.7m以上で、深さは0.5mほどの石垣状遺構を検出。東壁は石垣がほぼ水平になっているが、北、南両壁は斜めに薬研掘り状に入っている。東壁は下段に丸太が埋められている。この井戸状遺構の中から漆塗りの木椀、柿、梅、スイカの種のほか寛永通宝1枚、近世瓦や瀬戸物が多く出土。

(11月21日) 4C区の井戸状遺構(SK4004)を掘り上げ、写真撮影。実測用の割付。1A～2B区にかけて少し掘り下げる。

(11月22日) 井戸状遺構(SK4004)の平面実測。3～4A・B・C区の掘り下げ。

(11月25日) 調査区全面を精査し遺構面を出す。第3次調査で確認していた掘立柱建物(SB4002)の西側にさらに南北に1列柱穴掘形が検出され、この建物は三間四方の総柱建物となった。製塩土器やTK23期の須恵器の出土する層を切り込んでおり、それより新しいものと思われる。

(11月26日) 検出した遺構に白線を入れ、写真撮影。規模の大きい土坑から掘り下げる。4C区から出土した小玉、鎌状鉄器の取り上げ。

(11月27日) SK4003からは礫が多く出土。SK4001は礫が少なく、SK4002には礫が含まれず黄灰色粘土がブロック状に入るといふ、それぞれ違った状態ある。SK4004よりは時期の遡る遺構と見られる。トレンチ西端から東に並ぶ小土坑は、小規模な掘立柱建物(SB4001)になることが判明。柱穴の1つから黒色土器片が出土することから、平安時代の建物の可能性が高い。

(11月28日) SK4001、SK4002、SK4003の清掃、写真撮影の後、実測に取り掛かる。SK4003周辺の小ピットを掘るが、SB4001の柱穴から出土する黒色土器と同時期のものを含むがある。平安期の一連の遺構か。

(11月29日) トレンチ内の整美。SK4001を掘り下げると、下層から焼土面を検出。時期の遡る土器が出土する。実測作業を継続。

(12月1日) 西側に1～4区までの実測を終了。トレンチ北東部分を1×8m分拡張。

(12月2日) 新たに拡張した北東部分では土坑や柱穴掘形などの遺構はない。トレンチ西端から新たに1層掘り下げる。土坑状になっているため、下層部分は畦を残し掘り下げる。

(12月3日) この土坑内から出土する土師器群は、さらに外に広がっていくようで、第3次調査区の西端部で検出した竪穴住居と似た性格のものであろうか。焼木、焼土が床にへばりつく状態である。

トレンチ西端より東に向かって第3層の下層を掘り進むが、6世紀代の須恵器片を含む包含層であ

り、このトレンチ内では東西の遺構面の差が大きいようである。

第3次調査で検出していた総柱建物（SB4002）は今回明らかになった柱穴と合わせて三間×三間（6×6m）の正方形建物であることがわかった。

（12月4日） 作業開始後まもなくの降雨のため、土器洗い。

（12月5日） 4、5-A・B・C・D区の第3層下層を掘る。4D・5D区で新たに柱穴掘形を検出（SA4003）。全体的に見てこの5、6区を境に東西で土層の様相が大きく変わっている（西側は砂利を含み、6世紀代の須恵器片が見られるのに対して、東側は固く締った土層）。

（12月6日） 調査区西端のSK4001を掘り下げるが、近世のすり鉢など出土。6、7-A・B・C区を掘り下げるが、あまり変化はない。

（12月8日） 8区のSB4002の西側までを掘り下げる。細かい黄灰色の混じる粘質土層がベースで、その上面にピット、小土坑、溝などを検出。6-A・B区で竪穴住居状の遺構が見えてきた。須恵器片は検出されない。

（12月9日） 1、2区の第4層を掘り上げるが顕著な遺構はない。4・5・6-B・C区のピット群を検討するも、よく判らない。

（12月10日） 2B区のSK4001の遺物を取り上げる。5D区の第4層を掘り下げる。5A区の住居跡と見られる遺構内のピットを掘り下げる。

（12月11日） 調査区東部のSB4002とSA4001の柱穴掘形内を掘る。その結果SB4002の掘形内から6世紀後半の須恵器杯片が出土した。その結果三間×三間の総柱建物は、6世紀後半以降の建物であることが明らかになった。

（12月12日） 調査区東部の建物の柱穴掘形内を続けて掘る。柱痕は残っていないようである。その後調査区東半分の写真撮影を行う。

（12月13日） 昨日に続いてSB4002とSA4001の柱穴掘形を掘る。また下層で検出した5・6-A・B区の住居跡（SI4001）内を掘る。調査区中央部分のピット群を掘り下げる。

（12月15日） 雨上がりのため、水抜きの後全面清掃し写真撮影。

（12月16日） SI4001を掘り下げる。5世紀後半の須恵器片が土師器、焼土と共に出土。馬歯2本も出土。

（12月17日） 1A～3A区で幅2mトレンチ内を掘り下げる。上層（第4層下層）にはまだ須恵器片を含むが、下層（第4層最下層）は土師器のみ。床面に土師器がへばりついている。竪穴住居跡（SI4002）の一部であることが判明。調査区の200分の1の平板実測図を作成。北壁断面実測図の作成。

（12月18日） SI4001の写真撮影と実測。昨日に続き1A～3Aの幅2mのトレンチ内で検出した住居跡（SI4002）を掘る。

（12月19日） 調査区内の排水と清掃。午後2時から記者発表。池田桜井市長の挨拶、石野委員長の経過報告、前園の調査報告。3時から市文化財専門委員、由良大和文化協会、諸宮調査会の皆さんに説明を行う。

(12月20日) 航空写真撮影のため調査区内を清掃するが、天候の関係で今日は撮影不可能との連絡あり。午後は明日の現地説明会に備えて周辺の環境整備と、5 A区の第5層を掘り下げる。今のところ第3次調査の最終段階で検出した掘立柱遺構(SA3001)に続くと思われる柱穴は見つかっていない。来週から研修に来るニューヨーク州立大学のアンジェロ君を連れて、関西外国語大学の戸田秀典先生来訪。

(12月21日) 現地説明会。参加者は約200名。

(12月22日) 午前中、朝倉小学校の全児童順次見学。清水が説明。12時20分、航空写真撮影。午後は実測のための遣り方打ち。6区および7区の下層を確認するためのトレンチを設定し、掘り下げる。

(12月23日) 遣り方打ちのあと、平面実測開始。8 A区で下層から竪穴住居(?)のような遺構が現れる。飛鳥時代の建物の下層での検出である。焼土層はこの竪穴の内部のものかも知れない。アンジェロはSI3001から出土した土器の復元作業。本日も朝倉小学校児童の見学。清水が説明に当たる。

(12月24日) 平面実測。

(12月25日) 実測終了。現場、道具およびプレハブ事務所を清掃し、本年の現場作業を終了。

(昭和62年(1987) 1月7日) 作業再開。調査区内にたまった水抜きをし、6区のサブトレンチを貫通させて掘り上げ、基本土層の確認。4・5・6区の南側のサブトレンチを掘り下げ、TK208期より古そうな須恵器を確認。

夕方から砂を運び、調査区の東から埋め戻しを始める。

(1月8日) 6区のサブトレンチ東壁の断面を検討。埋め戻し用の砂の搬入(20m³)を終了。引き続き埋め戻し作業。

(1月9日) 断面図に土層名を記入。埋め戻し継続。

(1月10~22日) 埋め戻し作業。

(1月23日) 現地調査終了。機材ほか撤収。

(1月24日) 協本地区の区長、副区長、小学校、地主への調査終了の挨拶。

【協本遺跡第5次調査】

(昭和63年(1988) 2月4日) 本日より調査を開始する。器材搬入、プレハブ調査事務所設営。調査区を設定し、調査前の写真を撮影。

(2月5日) 耕作土の除去作業を人力で開始する。調査区周辺にフェンスを設置。

(2月6~9日) 耕作土の除去作業。

(2月10日) 床土(橙褐色土)の除去作業を開始。調査区に3m間隔でグリットを設定(東西はアルファベット、南北は数字)。2 F地区で人頭大の礫が現れる。ジェネレーターの搬入。

(2月12日) 床土除去作業。ベルトコンベアーの搬入。

(2月13日) 床土を除去し、第3層(暗褐色土)を確認したが、上面で遺構の存在は認められず、少し掘り下げる。下層より黄灰色土、および赤褐色土層が現れ、この上面で素掘り溝を検出する。2 E、

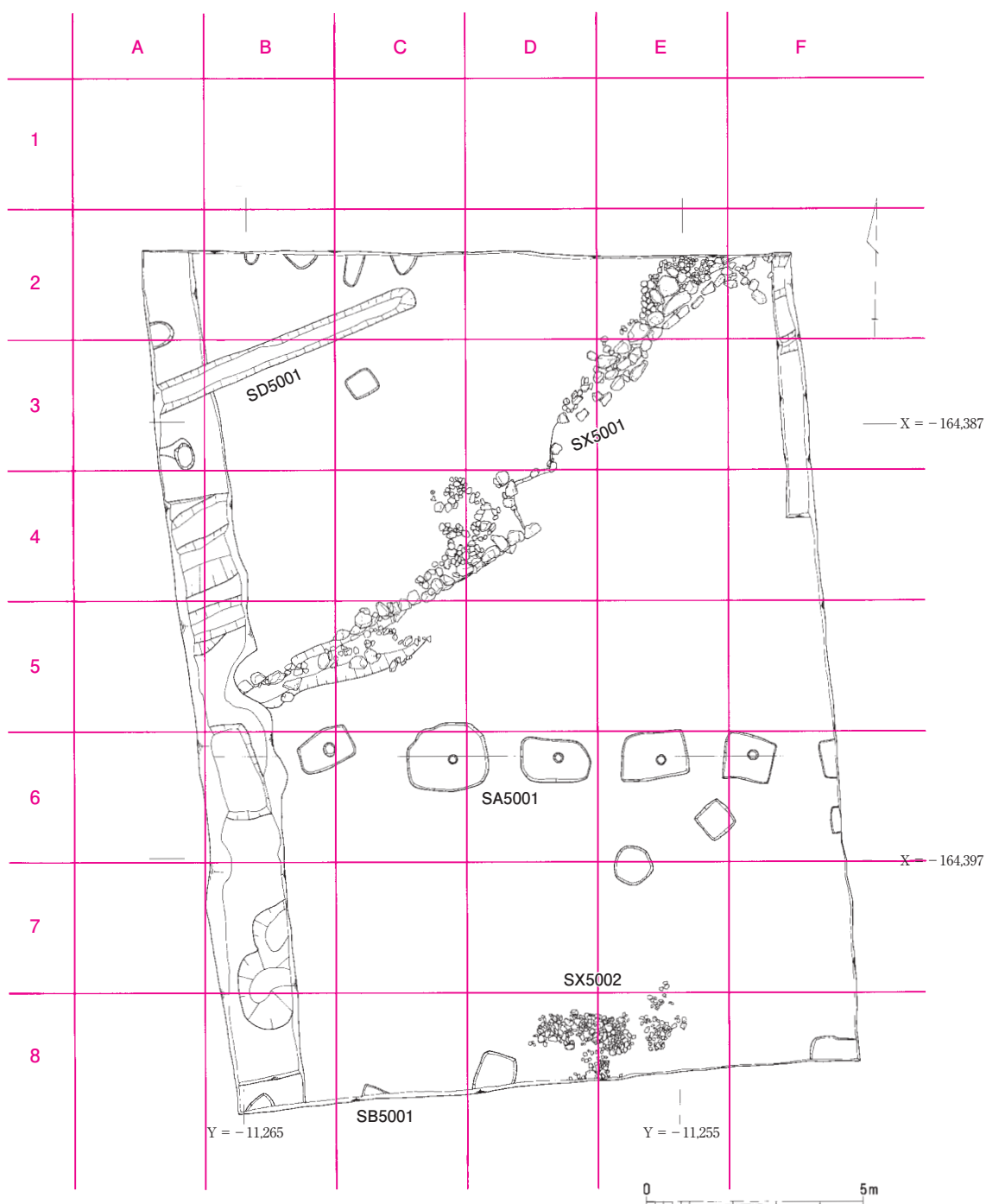


図5 脇本遺跡第5次調査 地区割図 (1/150)

2 F区で検出した人頭大の礫群は、この層位に属すと思われる、東南の面側をそろえ、内側つまり北西側にはこぶし大の小礫が見られる。6世紀代の須恵器片が出土する。

(2月15日) 第3層(暗褐色土)を除去し、素掘り溝(SD5001)を検出。

(2月19日) 第1遺構面である素掘り溝を完掘。写真撮影の後、20分の1の平面図を作成。

(2月20日) 素掘り溝実測終了部分より、ベースである第5層(黄灰色土)の除去をはじめる。この層には須恵器、土師器片に混じって、平安時代の黒色土器片も混じる。

(2月25日) 第5層上面(調査区北側では石敷上面)の写真撮影を行うため、午前中は清掃。同時に実測用の杭打ち。午後写真撮影。平面実測も始める。また調査区南側から第5層を掘り始める。

(3月2日) 2F区の石列は、石溝になりそうである。幅は約140cm。出土遺物には4、5世紀の土器もあるが、6世紀後半の須恵器片が目立っている。4・5-C・D区でも斜め方向の石列が現れ始めるが、先の溝との関連はまだわからない。石の実測の終了した4B、4C、4D区を掘り始める。

(3月3日) 調査区南部では第6層を掘る。石垣状遺構(SX5001)の検出作業と実測。午後から雪が激しくなり3時過ぎに作業を早めに終えた。

(3月4日) 調査区中央部を北東から南西方向に走る石垣状遺構を追う。石垣外側(南東側)の暗褐色土から出土する土器は、6世紀後半のものが多く。調査区南端部では第7層を掘り上げるが、遺構面ではない。E3区第6層の砂質土層から7世紀後半から末葉の須恵器杯身、土師器片が出土。D5区の第6層からは馬歯出土。

(3月5日) 2～5・B・C・D区の石垣状遺構の周辺部を掘る。D7区で6世紀中～後半の須恵器杯の完形品を検出。溝もしくは土坑の一部と見られるが調査区の端なのでよく判からない。来週から調査区を東に拡張することにする。

(3月7日) 調査区東南部(5E～8E・5F～8F)を拡張し、表土層と第2層～第4層を掘る。他の部分は平面実測を行う。

(3月8日) 拡張区の第4層の下面で東西方向の柱穴掘形を3個、二間分検出。柱間は約2.1m。この柱穴掘形は第3次調査区で検出した7世紀後半の柱列の延長線上に当たると見てよい。しかし、第3次調査区の東端の柱穴掘形とこの調査区の西端の柱穴掘形の間には、22.4mの空白地帯が存在する

(3月9日) 午前中写真撮影のための清掃を行い、午後は調査区南側と東側から石垣と石敷き検出状況を撮影する。

(3月10日) 調査区南西隅に幅1.5m、長さ約6mの南北トレンチを設定し、さらに掘り下げる。B5・6区、C5・6区の石垣の実測。

(3月11日) 昨日に続き石垣の実測。調査区南西隅のB7・8区の第7～8層まで掘る。第8層はトレンチ内で土坑状に深くなり、底部に礫が見られ、若干ではあるが5世紀代の須恵器・土師器片が見られる。

調査区東拡張区で検出した二間の柱穴掘形はさらに西側にも続いていたことが判明した。調査区内では7個、六間分あり第3次調査の柱列(SA3002)の東端とは11mの空間が存在することになり、この部分が出入り口のようなものになるのだろうか。

(3月12日) 調査区南西部のトレンチをさらに下げる。また調査区の南壁に沿って東西方向に柱穴掘形と見られる土坑がいくつか現れる。この遺構は第8層の上面で検出されることから、これが遺構面と見られる。この第8層は暗黒褐色土でやわらかい整地層とみられ、内部から5世紀代の須恵器・土師器片が出土する。第9層の暗灰褐色砂質土にも須恵器片が含まれている。

石敷きの実測を続けるが、午後は降雨のため作業を中止する。

（3月14日） 発掘作業は休み、平面実測を行う。午後3時から12日に急逝された作業員の山下秀夫氏の葬儀に、前園、橋詰、作業員の方々と参列。

（3月15日） 雨のため整理作業。

（3月16日） 調査区南端部（D8・E8区）の土器片の集中部分（SX5002）を掘る。（この土器はすべて土師器で、須恵器片は含まない。）石敷きと土器群の実測。

（3月18日） 午前中は調査区内の排水作業に費やす。D8、E8区の土器群を掘る。石敷きの実測作業。

（3月19日） B2・3・4区、C2・3・4区の第9層（礫層）をはずし、第24層を除去すると、全体に暗黄褐色砂質土層になる。この上面に、溝や柱穴状の遺構が見え始める。これらは石敷きの前身遺構であることは間違いなく、6世紀後半を遡る次期のものである。

D7・8区の土器群は5世紀後半のもので、この地域は5世紀後半のベースが調査区の北地区よりもやや高くなっているようなので、この面で遺構検出を目指さなければならない。

（3月22日） B2・3・4区、C2・3・4区、D2・3・4区の第9層（礫層）をはずす。この第9層は、石垣、石敷きを作る際の整地層に当たるが、5～6世紀中葉の土器片が目立って出土する。このことから石垣、石敷きは6世紀後半以降に築かれたことは明らかで、昨日に続き検出される溝、柱穴は6世紀中葉以前ということになる。時折雨が降り、実測作業がはかどらない。

（3月23日） 昨日に続きB・C・D区の2・3・4区の第9層を掘り、下層から現れた東西方向の溝を掘る。また石垣に平行して北側に見えていた土層の違いは、整地層の一部が溝状に見えていたことがわかった。

（3月24日） B2・3区、C2・3区の柱穴、溝を掘る。内部から出土する遺物は、古墳時代前期から中期の土師器がほとんどである。E8区の土器群の精査。大部分の土器は古墳時代前期の土師器だが、少量ではあるが須恵器片も含まれることから、何らかの理由で5世紀後半の大規模な整地に伴って埋め込まれた可能性が考えられる。石敷きの実測作業も続ける。

（3月25日） 雨のため、土器洗い、記名、図面整理。

（3月28日） 調査区の西端、B区に南北にサブトレンチを入れ掘り下げる。

（3月29日） 昨日に続きB区のサブトレンチを掘り進める。調査区の石垣状遺構の下層には、人工的に掘り込んだと思われる溝状の遺構が東西に続いている。内部には礫を多く含み、土師器片あり、整地土と見られる。早朝から池田桜井市長、狩田助役、外嶋教育長に調査状況を報告する。

（3月30日） 調査区全体の清掃の後、写真撮影。明日の記者発表のための資料作り。

（3月31日） 午前11時から記者発表。午後1時から航空写真撮影。その後遺構の実測。

（4月3日） 午後2時から4時まで現地説明会。参加者は約400名。

（4月4日） 調査区の北東部の壁沿いにサブトレンチを入れる。砂礫層は溝状となり土師器、須恵器片を含んでいる。石垣、石溝の外側はやはり溝（川）として機能していたのだろう。全景写真撮影。

（4月8日） 調査区南端部の土器群の取り上げ。

(4月9日) 実測作業。

(4月16～20日) 埋戻し作業。

【脇本遺跡第6次調査】(地区割り図なし)

(平成元年(1989)1月18日) 調査事務所(プレバブ)建設、発電機の運搬の後発掘区の設定。

(1月19日) 表土除去作業。

(1月21日) 表土除去作業。昨日の雨のために排水に手間取る。

(1月24日) 表土除去作業。第2層の掘り下げを始める。

(1月25日) 調査区東から第3層を掘り進めるが、すぐに遺物が出土し始める(5～6世紀の土師器、須恵器、製塩土器片)。第5次調査区に近い、南側では礫がみられる。

(1月26日) 午前中第3層を掘り下げる。午後は降雨のため野外作業は中止し、埋蔵文化財センターで土器洗い。

(1月27日) 第3層を除去すると遺構面が現れる。調査区中央部に、やや西に振った南北方向の細い溝、それに平行するような南北方向の柱列が2条現れる(A・B)。この柱列は対になるようだ。柱列Aの柱穴掘形内には黄褐色土のブロックを含み、溝などと同じ焼土を含むピットに切られている。西側でも東西方向の柱穴を2個検出する。

(1月28日) 南北柱列Aの西側に平行して焼土を含む柱列C(A・B・C・柱列はSB6004)を検出。現状での全景写真撮影。

(1月30日) 調査区中央部から南で、東西方向の素掘り溝3条(中世)、調査区東部で南北方向の素掘り溝2条(中世)を検出し、内部を掘る。座標ポイントの移動。

(1月31日) 中世面の写真撮影と実測。調査区近くの水田周辺に金網を張る。

(2月2日) 第4層を掘り下げる。調査区東側で出土している遺物(土器)を実測の後、取り上げる。第2遺構面で遺構検出を目指す。

(2月3日) 全体掘り下げの後、遺構確認。調査区西側で南北方向に柱穴が7個並んで検出される。それに平行して中央部で南北に柱穴9個を検出。南端部で東西に3個の柱穴を検出したことから、これらは一連の建物である可能性が出てきた(SB6004)。またその南東部で二間×三間の南北方向の建物(SB6005)が重複するように建てられていることが分かった。

(2月6日) 遺構面掘り下げ。SB6005の柱穴掘形からの出土遺物では時期の特定は難しい。調査区北西隅で二間×三間以上の建物(SB6003)を検出。またそれに重複する竪穴住居からは飛鳥時代前期の土師器が出土。

(2月7日) 遺構面掘り下げ。南北にほぼ3列に平行して並ぶ柱穴掘形のうちの西列を掘り下げてみると、いずれも掘形内には焼土が多く見られることから、火災後に建てられた建築物の可能性が強い。いずれも深さ60～70cmと深い。八間分10個を掘る。飛鳥時代の竪穴住居(SI6005)の写真撮影。

(2月8日) 中央の柱列を掘り下げる。同時に東柱列の掘り下げも開始。先に中世時代の柱列と考え

ていた西列と中央列、東列いずれも関連していることが分かってくる。午後は降雨のため埋蔵文化財センターで土器洗いをする。

（2月9日） 雨上がりの後、全体をもう一度削り、遺構の検討を行う。西列と中央列の間に並ぶ小型の柱列が解釈できない。

（2月10日） 作業開始間もなく降雨。室内で土器洗い。

（2月13日） 遺構面を清掃し、柱穴群を掘り下げる。また飛鳥時代の住居跡の柱穴も明瞭になる。

（2月14日） 午前中は遺構の清掃。午後から白線を引き、大型建物および全体の写真撮影を行う。調査区北東隅の竪穴住居（SI6004）を切って大型建物（SB6004）があり、SI6004から出土する須恵器は5世紀末から6世紀初頭のものであることから、SB6004はその時期以降に建てられたものであることが明らかになった。

（2月15日） 平面実測作業とレベル記入作業。

（2月20日） 4日間雨が続いたため、調査区内の全体清掃に時間を費やす。その後写真撮影、壁面清掃を行う。

（2月21日） 西トレンチを設定し掘り下げる。橿原考古学研究所の現地検討会のメンバーが見学。ラジコンヘリで航空写真撮影。SI6004は6世紀前半まで下ると見られる。そのため大型建物SB6004は6世紀後半から末頃に限定できる。午後は降雨のため埋蔵文化財センターで土器洗い。

（2月22日） 午前中清掃し、午後1時から航空写真撮影。その後西トレンチを掘り下げる。

（2月23日） 西トレンチの掘り下げ。3層に分けて遺物検出（第4層中・下層・第5層）。土師器高杯が多い。SB6004につながると見られる南北の柱列を検出。

（2月25日） 奈良国立文化財研究所の宮本長二郎氏が、埋文センターの受講生約20名を引率され来訪。東西に庇の付く南北棟で良いだろうとの見解で、さらに柱もしっかりしているので相当の建物であろうとのコメントをいただいた。

（2月27日） 西トレンチの掘り下げと、身舎と西庇の南から6番目の2つの柱穴の断ち割りを行う。

（2月28日） 断ち割りを行った2つの柱穴掘形ともに柱穴の抜き取り痕跡あり。断面図を作成。

（3月1日） 西トレンチの掘り下げを続ける。南側部分に土器が集中している。また柱穴掘形の輪郭が一部見え始めるが、10時過ぎから降雨。埋文センターで土器洗いをを行う。

（3月2日） 西トレンチをさらに掘り下げる。柱穴掘形がさらに明確に複数見えるようになる。南に集中する土器群には高杯が目立つ。

（3月3日） 掘立柱建物を検出。南北二間で東西は二間以上の東西棟（SB6001）で、方位は北からやや西に振っており、検出層位から見ても、第1次調査で検出した建物と同時期である可能性が高い。実測を行い、レベル記入作業。

（3月6日） 午前中清掃。午後記者クラブの写真撮影。その後、西トレンチ下層の掘り下げ再開。土器群が現れ、竪穴住居の可能性が出てくる。

（3月7日） 西トレンチ下層の竪穴住居（SI6003）を確認し掘り進めると、さらに北側に1棟（SI6002）、

南側で1棟（SI6001）を確認。もっとも新しいSI6003からは須恵器片（5世紀中頃）出土。

（3月8日） SI6003を掘り進め炉状のものを検出。SI6001・SI6002はSI6003によって壊されているため詳細は不明。この西トレンチで3棟、さらにトレンチ北東隅でSI6004（6世紀前半）、北西隅でSI6005（7世紀初め）の計5棟の竪穴住居を検出。掘立柱建物もSB6001～6005までの5棟を検出したことになる。午後記者発表。市長も同席。

（3月9日） 南トレンチを掘り下げる。南壁と西壁の実測。SI6003を掘り下げると小判形の焼土面を持つ炉跡が現れるが、SI6003に伴うものか、SI6001に付属するものか？

（3月10日） 南トレンチの掘り下げ。焼土の入った溝（SD6002）を掘る。SI6003の実測を行い、遺物を取り上げる。

（3月11日） 午前中現地説明会の準備。午後説明会。教育長、社会教育課長、係長出席。見学者約250名。

（3月13日） 雨天のため室内作業。

（3月14日） 断面図作成のための実測。

（3月15日） トレンチ埋め戻し開始。砂20m³を入れる。

（3月16日） 土入れの開始。南トレンチの実測終了。

（3月17～23日） 埋め戻し。

（3月24～25日） 機材撤去。調査終了。

【協本遺跡第7次調査】

（平成元年（1989）11月17日） 本日から調査開始。機材搬入（埋文センターから）。

（11月18日） 機材搬入（橿原考古学研究所から）。

（11月19日） プレハブ建設。

（11月20日） 調査区設定と周囲の環境整備。

（11月21～22日） 表土除去作業。

（11月24日） 地区内を16区に設定する。11・12・15・16区に集中的に礫、須恵器片が見られる。

（11月25日） 第2層の掘り下げ。2・6・15・16区で扁平な石の頭が見え、周辺に集中して須恵器片が認められる。

（11月27日） 第2層の掘り下げ。

（11月29日） 雨上がりでトレンチは水没。排水に手間取る。第2層を掘り上げ、第3層を下げる。須恵器片が多い。

（11月30日） 第3層を掘る。

（12月1～2日） 第3層の褐色土層を掘る。

（12月4日） 第3層を掘り進めるが、トレンチ南東隅あたりで須恵器片が多く出土。

（12月5日） 第3層掘り下げ。東端部に礫層がある。6世紀末から7世紀初頭の須恵器片が集中して

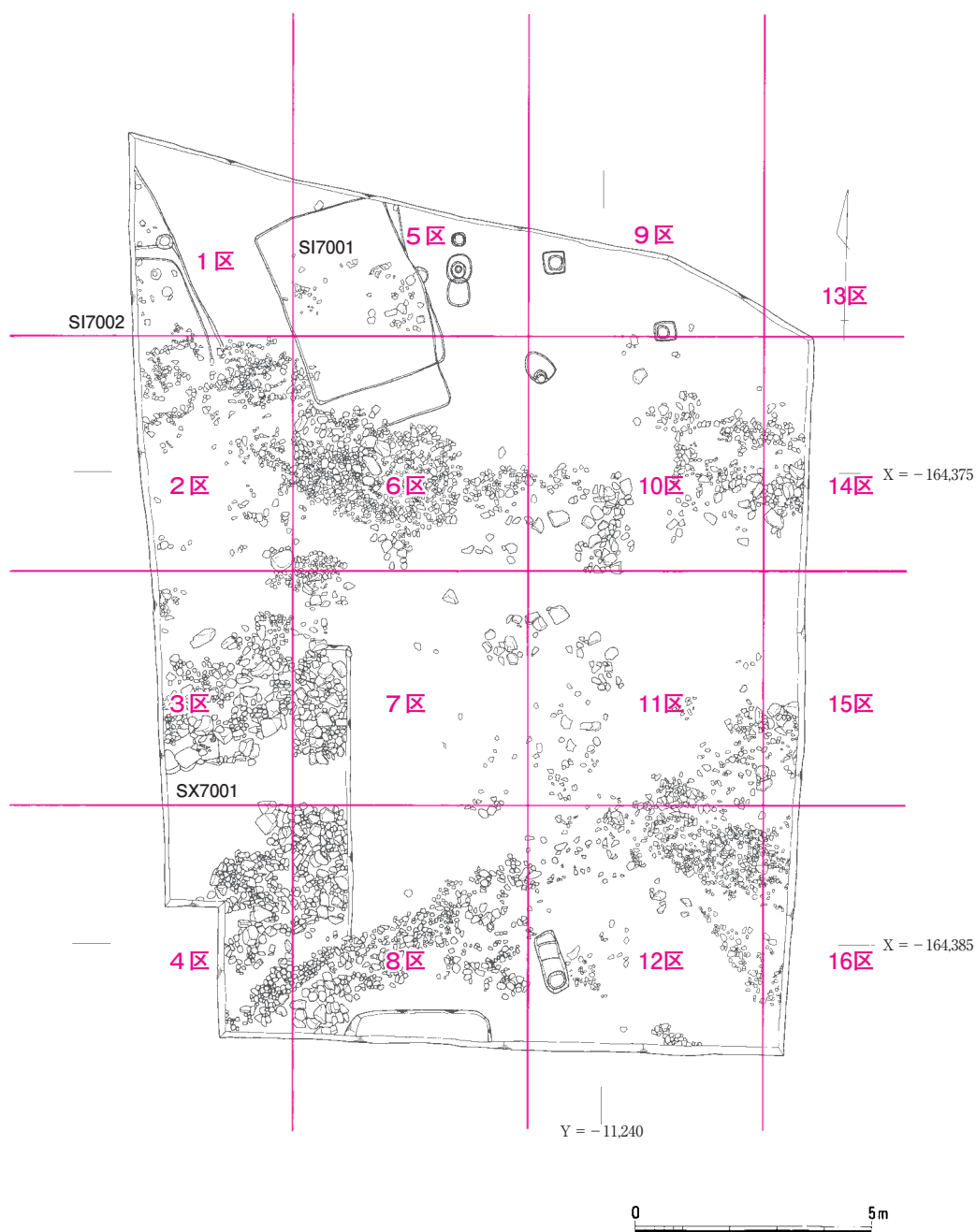


図6 脇本遺跡第7次調査 地区割図 (1/150)

出土する。

(12月6日) 須恵器群清掃と全体の掘り下げ。

(12月8日) 掘り下げを進める。調査区の北東橋から南東端を結んだ線から北側の礫を多く含む土層は、6世紀後半の遺構面かもしれない。それに対して南側の土器片、礫を含む層は埋土だろうか。

(12月9日) 掘り下げ。6区の礫層北側の土師器を取り上げる。レベル実測も行う。

(12月11日) 7・8・11・12区を掘り上げる。土器は11区に多い。100分の1の図を作成。

(12月12日) 11・12区の第4層を掘り下げ。この土層も埋土とみられ、土器片が多い。

(12月13日) 調査区全面を精査し、特に1・2区で遺構の検出に努めるが、まだ現れない。

(12月15日) 昨日の雨のため調査区は水没。水抜きと清掃に時間を費やす。

(12月16日) 清掃、写真撮影。4・5区で竪穴住居らしい遺構と焼土を検出。第4層の掘り下げを続ける。桜井中学校のいにしえクラブの先生と生徒見学。

(12月18日) 第4層の掘り下げを続ける。

(12月19日) 調査区の平面実測。第4層の掘り下げ。調査区中央西側に続く石列は、第5次調査で検出している石垣(SX5001)に続くものであろう。石の中に混じる遺物は6世紀末から7世紀初頭のものが多く、また調査区北西隅(1区)で竪穴住居の一部とみられる遺構(SI7001)を検出、内部から5世紀末から6世紀初頭の遺物が出土。

(12月20日) この調査区内の遺構と、第5・6次調査で検出した遺構群を同一時期とみてよいのか、6世紀末をどう考えるのか調査員で議論。その後の検討で、この調査区の石列は、第5次調査区の石列、石溝に続く同時期のものとの結論を得た。午前10時半、朝倉小学校6年生1クラス30名が見学。

(12月21日) 礫層実測、レベル記入作業。5・6・7・8区掘り下げる。第4層には須恵器片が多く含まれている。午後は降雨のため埋文センターで土器洗い。

(12月22日) 礫層実測、レベル記入作業。9・10・11・12区第4層掘り下げ。須恵器片が多く含まれている。

(12月23日) 1・2・5・6・9・10区の土器実測と写真撮影。9区には特に弥生中期土器がかたまっている。セットとして長頸壺、広口鉢、甕、小壺4個が近接してあった。13区の礫層そばで、小坏蓋と身があった。礫層は7世紀初頭まで下るのか。

(12月25日) 調査区全体の清掃、石の水洗い。SI7001から鉄鏃1個出土。

(12月26日) 全景写真撮影。しばらく調査を中断するので、周辺に杭を打ち金網を張る。調査区全体にシートをかけ、本年の現地調査を終了する。

(平成2年(1990)1月5日) 調査区全体の掘り下げ。銅鈴出土。

(1月6日) 午前中掘り下げ。全面から須恵器片出土。昨日銅鈴の出土したSI7001からはほかの遺物は見られない。午後から降雨のため埋文センターで土器洗い。

(1月8日) 第5・6区の実測作業を行う。4区の掘り下げたところで馬歯と須恵器高杯出土。調査区内に広がる礫は、中央部が窪みをもって広がる状況で、下層は砂利層になる。SI7002は把手付甕が出土し、6世紀末か7世紀初頭の遺構か。第6次調査の建物群との関係が問題になる。SK7001はより古く、5世紀後半のものか。

(1月9日) 第8区の実測作業を行う。SK7001を掘り下げる。土器が少量出土。SI7002からは6世紀末から7世紀初頭の土器が出土する。石敷きからの出土土器に近い。

(1月11日) SK7001の掘り下げ。竪穴住居の可能性が出てきた。内側でピットを検出。調査区西端のサブトレンチを下げるが、下層は礫層になる。午後は降雨のため、埋文センターで土器洗い。

(1月12日) SK7001内の南半部を下げる。全景写真撮影の後、実測作業に入る。

(1月13日) 実測作業。

(1月15日) 実測作業。

(1月16日) 雨のため野外作業は行わず、明日の記者発表のための資料作り。

(1月17日) 午前中記者発表。午後7・8区サブトレンチを拡張。現地説明会は20日に行うことを決める。

(1月18日) 7・8区サブトレンチを掘下げると、U字状の窪みが現れ、中に礫がつまり、上面には盛土がなされている遺構を検出。排水施設の可能性がある。ラジコンヘリで航空写真撮影。

(1月20日) 午前中清掃。午後は現地説明会を行う。約200名参加。

(1月21日) 日曜日だったが現地解放。約20名の見学があった。

(1月22日) 午前中実測、写真撮影を終える。午後埋戻し開始。

(1月23～27日) 埋戻し作業。27日調査は終了。

(前園)

第3章 発掘調査

第1節 朝倉小学校地内の調査

(1) 第1次調査 (図7～11、図版2～8)

1. 遺構と遺物

調査の対象となった学校敷地は、桜井市大字黒崎の西端にあたり、脇本に近接している。地形的には初瀬川北岸の河岸段丘上に位置する。調査は体育館建設予定地の事前調査として、昭和56年(1981)7月末から学校北側尾根の斜面、および谷合いの水田に12か所のトレンチを設定して行った。具体的には水田部に6か所、尾根の斜面に6か所で、トレンチの規模は幅2～3m、長さ5～30mとその位置によって制限を受けたが、のべ約500㎡になった。

尾根東の谷口部においては、耕作土直下は河原石と砂礫層になり、古墳時代後期より中世の遺物を含んでいるが遺構の存在は認められない。

体育館建設予定地である尾根西側の水田で、耕作土直下に河原石によって北東から南西方向に流れる石積みを施した溝(SD1001)を検出した。周辺部からは6世紀初頭の須恵器片が出土した。この溝を検出した水田は、谷口の比較的狭い地域ではあるが、その畔の方向は、この水田より谷奥の水田が地形に従った畔であるのに対して、条里地割とほぼ同じ方向をとっている。石溝は、この水田を斜めに横断し、耕作土直下の素掘り溝が畔の方向と同じであることから、この地域に条里が施された以前の遺構であると思われる。

調査の対象地域は、試掘トレンチで確認した石溝とその周辺を主とした。調査範囲は石溝の方向を主軸として、幅約14m、長さ約30m設定したが、後に西半部を幅約6m、長さ約20m拡張した。調査面積は約900㎡。

検出した遺構は、石溝のほかは径15～20cmの小ピットが数か所あるのみだった。

石溝は、現存長約35m、幅約1.5m、深さ約40～50cmの素掘り溝に、内幅約40cmを残し、両側に自然石を2～3段積み上げたもので、溝底部は素掘りのままである。石積みは最下段を立て、2段目から上は横に積み上げているのが多い。溝内堆積土の層序は、底部より砂層、砂質土となり、溝底部の窪地には粘質土が堆積している。溝内には、底部より10～15cm以上に石積みの石と同様の河原石が落ち込んでいることから、復元すれば溝壁の石積みが現存高より2～3段以上積み上げられていたと思われる。

溝内出土の遺物(図10)は少なく溝底部から6世紀初頭の杯蓋を検出し、落ち込んだ石の上部に、6世紀後半の須恵器壺片が石に挟まった状態で検出された。

2. 小結

溝の時期を示す出土遺物は少ないが、6世紀初頭前後に掘開、構築され、6世紀末以降、条里制による区画整理以前に崩壊し埋没したことが考えられる。

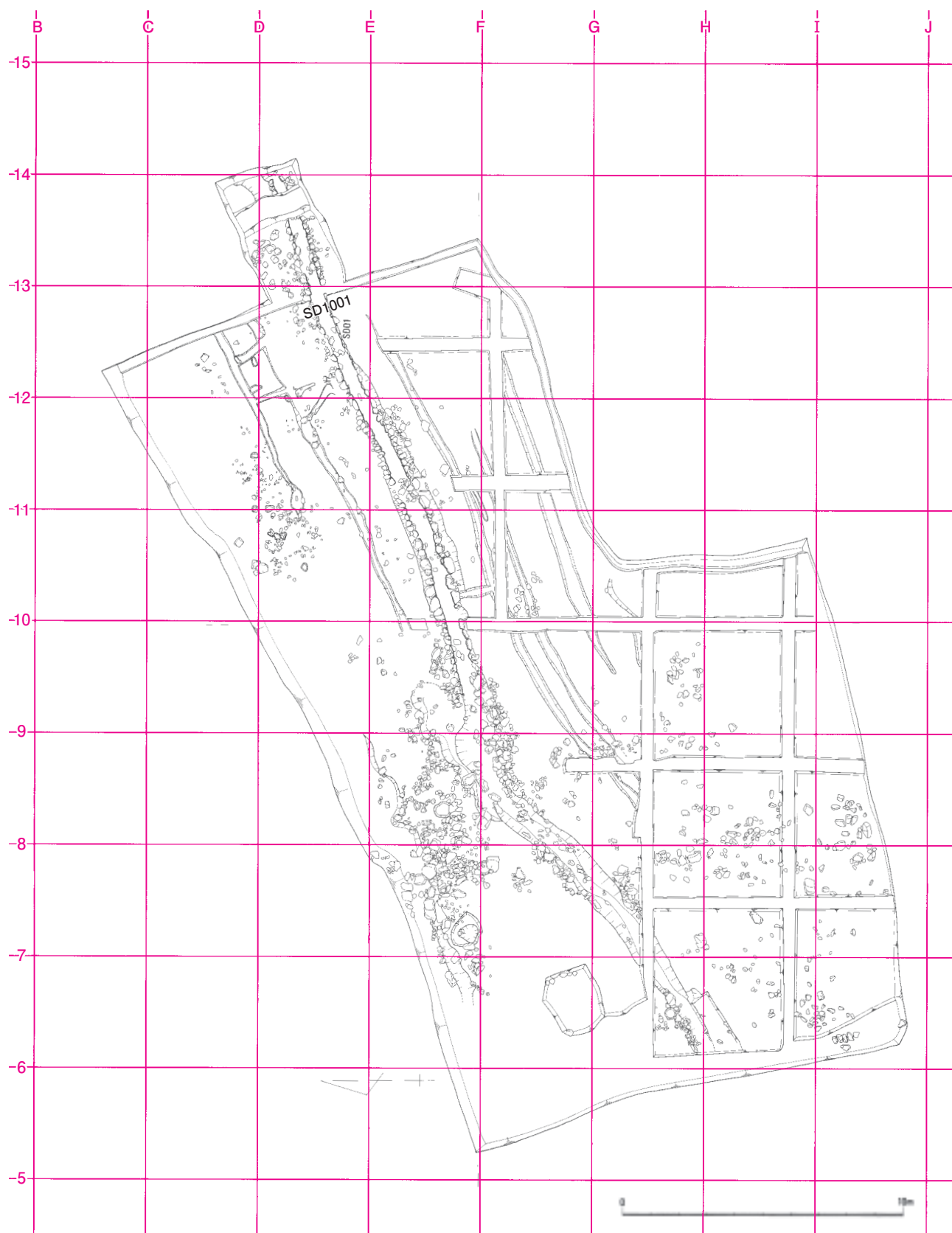


図7 朝倉小学校地内の調査（第1次調査）地区割図（1／200）



図8 朝倉小学校地内の調査（第1次調査）平面図（1／200）

石溝が掘開された旧地面は、溝内に落ち込んだ石を復元すると、検出面より2～3段高い位置が考えられるが、溝の周辺から検出した径4～5cmから10cm前後の岩礫による石敷き状遺構と同時期かどうかは不明である。

溝の谷奥側および尾根裾部は、溝南より地表面が水分を多く含みやや軟弱であり、雨後には湧水が見られ、南側は北より乾燥している。これらのことから、石溝は、湧水を受ける排水路と考えられる。

この調査により、体育館建設用地周辺部に6世紀初頭前後の遺構が存在することを確認したことから、その重要性をかんがみ、体育館を高床式にする設計変更を行い、遺構は現地保存された。

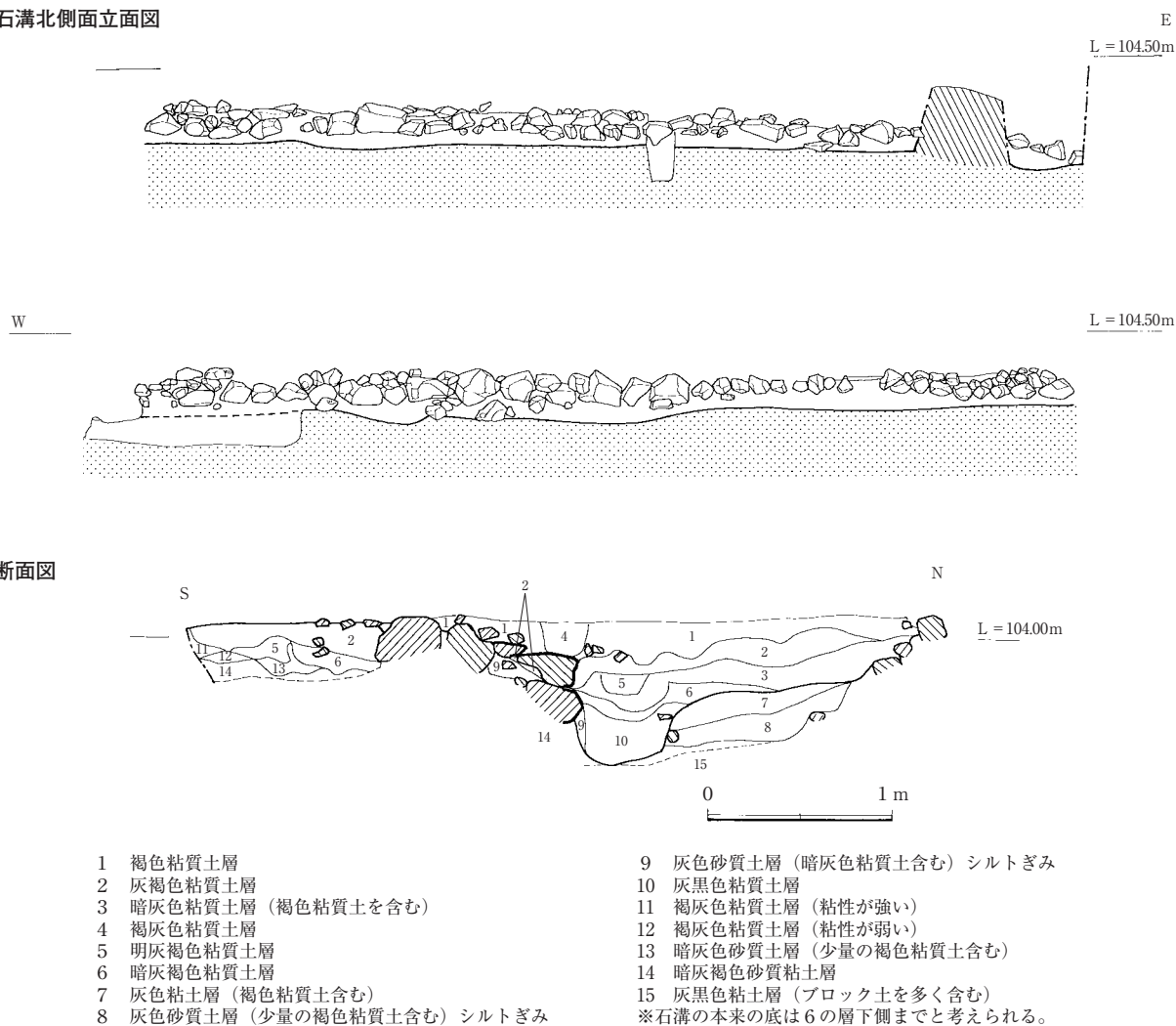


図9 朝倉小学校地内の調査（第1次調査）石溝立面・断面図（1／40）

表3 朝倉小学校地内の調査（第1次調査）出土遺物観察表（1）

図番号 図版番号	種 類	器 種	出 土 地	形 態	手 法	色 焼 胎	調 成 土	備 考
10-1 —	須恵器	高 杯 (杯部)	9E-29 石溝 落ち込み北側 811223	屈曲しながら外反し、大きく開く 口縁、端部は薄く尖っている。杯 底部は中央部が盛上っている。脚 部は欠失している。	外面は杯部回転ナデ、 底部ヘラケズリ。内面 は磨減している。	外：灰白色 内：淡黄灰白色、 やや軟質 小石4mm、砂粒を含む		
10-2 —	〃	杯 蓋	5、6I 溝 灰褐色砂質土 830624	口縁はやや脹らみを持ちながら垂 直に下り端部で内傾凹面をつくる。 天井部との境はやや鋭く断面三角 形を呈す。	回転ナデ調整。	外：暗青灰色 内：淡青灰色 良 好 良 砂粒を微量含む		
10-3 —	〃	杯 蓋	7I、8I 溝内 礫混黒褐色土 830617	口縁は垂直に下り、端部で小さく 内傾面をつくる。天井部との境は 鋭い。	回転ナデ調整。	暗青灰色：外 淡青 灰色 良 好 砂粒を少し含む		

表4 朝倉小学校地内の調査（第1次調査）出土遺物観察表（2）

図番号 図版番号	種 類	器 種	出 土 地	形 態	手 法	色 焼 胎	調 成 土	備 考
10-4 —	須恵器	杯 身	7HI 黒褐土 830603	立ち上りは短かく内傾しながら伸びる。受部は水平方向に突出し、あまり鋭さはない。		淡灰色 良 好 砂粒を少し含む		
10-5 —		高 杯 蓋	9E-29 石溝北側 褐色粘質土 811219	天井部のみ残存。扁平なつまみの上面は、少しくぼみがある。	外面は回転ヘラケズリ、つまみは回転ナデ。内面はハケメ調整。	淡灰色 良 好 砂粒（白色）を含む		
10-6 —	〃	杯 身	石溝 東拡張下層 811228	立ち上りは内傾し、端部は丸くなって終る。受部は水平方向に突出し鋭さは持たない。やや浅めの杯である。	口縁回転ナデ、底部回転ヘラケズリ。	淡灰色 良 好 小石、砂粒を含む		
10-7 —		杯 身	13C 16区 暗灰褐色粘質土 820107	立ち上りは短く内傾しながら伸びる。受部はやや外上方に突出し、鋭さは持たない。やや扁平な杯である。	口縁部回転ナデ、胴部～底部はヘラケズリ。	淡灰色 良 好 砂粒を少し含む。		
10-8 —	〃	杯 身	7、8FG36 石溝落込み 灰色砂質粘土 （下層） 811223	立ち上りは内傾しながら長く伸びる。受部は上外方に伸び鋭さは持たない。				
10-9 —		壺 （口縁）	8G-37 南西コーナー 灰褐色粘質土 811223	くの字形に外反する口縁、端部で面を作る。				
10-10 —	〃	壺	7、8FG36 石溝 落ち込み内 灰褐色粘質砂土 中層 811222	やや内傾気味に直立する口縁は端部で薄く尖り気味に終る。肩は角張っているが、胴部はあまり脹らみを持たない。重心が大きくズレた壺である。	口縁～胴部は回転ナデ、底部は乱雑な回転ヘラケズリ。	淡灰色～淡赤灰色 良 砂粒を含む		
10-11 —		壺	9E-29 石溝北 褐色粘質土 811219	口縁は直立し、やや屈曲をみせ外反する。端部は厚く面を作る。やや肩の張った体部を持つ。	外面は口縁端回転ナデ、口縁中央～胴部にカキメ、底部回転ケズリ。所々にタタキメ跡あり。内面は口縁回転ナデ、胴部ヘラケズリ。	淡灰色 良 好 小石3mm、砂粒を含む		

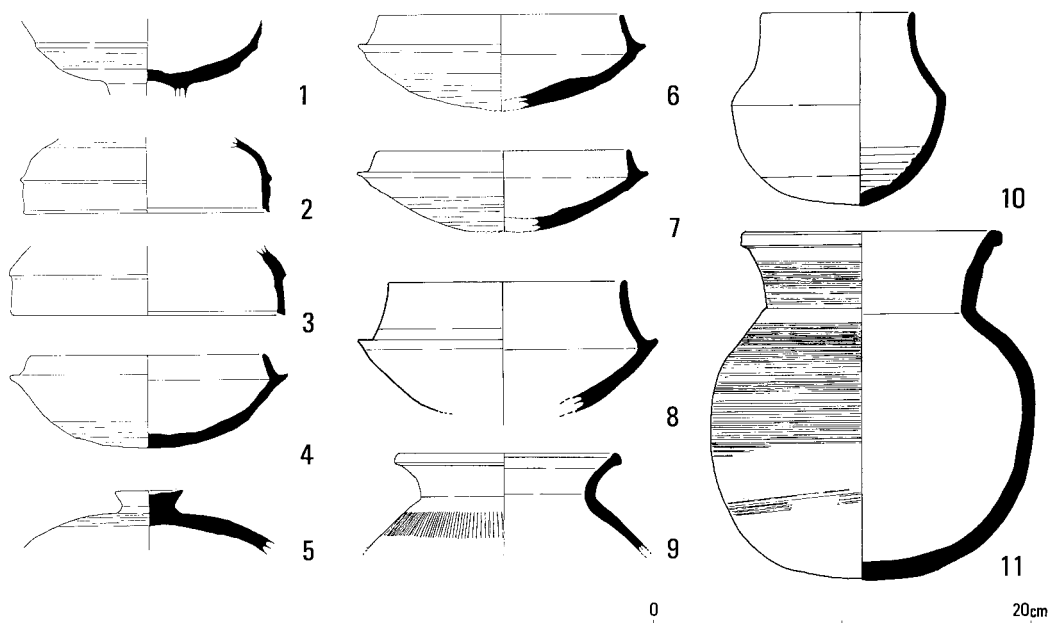


図10 朝倉小学校地内の調査（第1次調査）出土遺物（1／4）

1・5・11：9E 2：5・6 I 3：7・8 I 4：7HI 6：石溝 7：13C 8・10：7・8FG 9：8G

（２）第２次調査（図11、図版６～８）

１．遺構と遺物

朝倉小学校では旧校舎撤去地に水泳プールを建設することになり、その予定地が第１次調査で検出された石溝にも隣接することから、発掘調査を行った。調査は昭和58年（1983）４月14日～７月27日。

調査地の現状は西に接している水田面とほぼ同じ高さだが、後に造成されたもので、もとの地形は削平されていないこと、また校舎建築時に基礎部分から須恵器が出土したことも地元の方から教えていただいた。

これらのことより遺構の遺存が考えられるので、予定地内にトレンチを設定した。小規模なトレンチ調査の結果、盛土下に耕作土層、および遺構面が確認できたので本調査を実施することにした。

調査区域は、プール建設予定地およびその付属施設を含む南北約35m、東西約20mで、面積は約700m²。

調査地の層序は、盛土（約60～70cm）下に床土、そして遺構面となる。遺構面上には包含層的な土層は認められず、耕作地の開墾時に削平されたのであろう。

遺構面は、校舎の基礎および植木穴などによって攪乱されており、良好な状態ではないが柱穴掘形、溝状遺構（SD2001）を検出した。柱穴掘形には径1～1.2mの隅丸方形に近い平面形を示すものと、それより小形の円形または楕円形の２種がある。調査区内で建物などの建築物は確認できなかったが、磁北方向に、平行する２条の柱列（SA2002・SA2003）と、溝状遺構（SD2001）に並行する柱列（SA2001）を検出した。ほとんどの掘形で柱痕跡が認められたが、その大きさは径20～30cmである。SA2001の柱間は西から二間部分がいずれも4.8メートルで、それに続く二間部分がいずれも2.4メートルである。SA2002は四間分検出しているが、いずれも等間隔で2.4mとなっている。SA2003の柱穴の間隔には統一性は見られない。ちなみに平行するSA2002とSA2003の間隔は12mである。

溝状遺構（SD2001）は、調査区南部をほぼ東西方向に横断し、区外に延びている。その規模は、幅約1m、深さ80～90cm、長さ約20m（調査区内）。溝底部の傾斜はあまり認められない。溝内堆積層は黒色土であるが、溝中央より北は埋土状の堆積が見られ、布掘りの柵列が考えられるが、柱痕の確認はできなかった。ちなみに南に並行するSA2001との間は約1.6mである。

これらの遺構の時期を示す遺物については、遺構面上より６世紀後半の須恵器を検出しているが、柱穴埋土および第１次調査区のSD2001から出土した遺物によれば、６世紀前半以前が考えられる。

２．小結

この調査区で検出した遺構は３条の柱列（SA2001～2003）と溝状遺構（SD2001）、さらに多くの柱穴掘形である。柱穴痕跡のまったく見られない。すぐ北に位置する第１次調査区とは大きく様相を異にしている。地形的に見ても、この第２次調査区は平坦であり、そのことはこの地区に建造物を造営するために、地形に大きく手を加えた、つまり削平したことが考えられる。時期については明確にはできないが、SD2001が６世紀前半かそれ以前のものであることから、その時期と考えるのが妥当であらう。断面観察などからも、SD2001は溝と考えるよりも、柱列設置のための布掘り遺構とみるのが良

いだろう。SA2001はその柱列に伴う施設の可能性がある。SA2002とSA2003は磁北から方位をやや東に取り、SA2001、SD2002とは方向を異にしている。おそらく時期差を表しているのだろうが、詳細は不明である。
(萩原)



図11 朝倉小学校地内の調査（第2次調査）平面・断面図（1／200）

第2節 脇本遺跡 第1次・第2次調査（燈明田地区）

（1）はじめに

調査地は脇本集落のほぼ中央部で、初瀬谷と奈良盆地との出入り口の台地西端部にあたる。朝倉小学校からは西に約200m離れている。小字名の燈明田は、すぐ東に隣接する春日神社に由来するものであろう。この地の100m²を最初の調査対象地にした理由は、昭和14年（1939）の国道建設に伴って多くの土器類が出土した「燈明田遺跡」に接していること、土地所有者の松田新司氏の快諾を得られたことのほか、発掘開始前の現地踏査などにより、この脇本地区に規模の大きい方形区画が存在する可能性が指摘されたが、ここはその一部に含まれることなどがあげられる。この第1次調査で建物遺構の一部を検出したことにより、その広がりを確認するため隣接する東の160m²を第2次調査の調査区とした。したがってこの調査区は一連のものとして、報告はこの2つの調査区を1つの発掘区として行う。なおその調査の過程は先に述べた調査日誌抄を参照されたい。

（2）層序

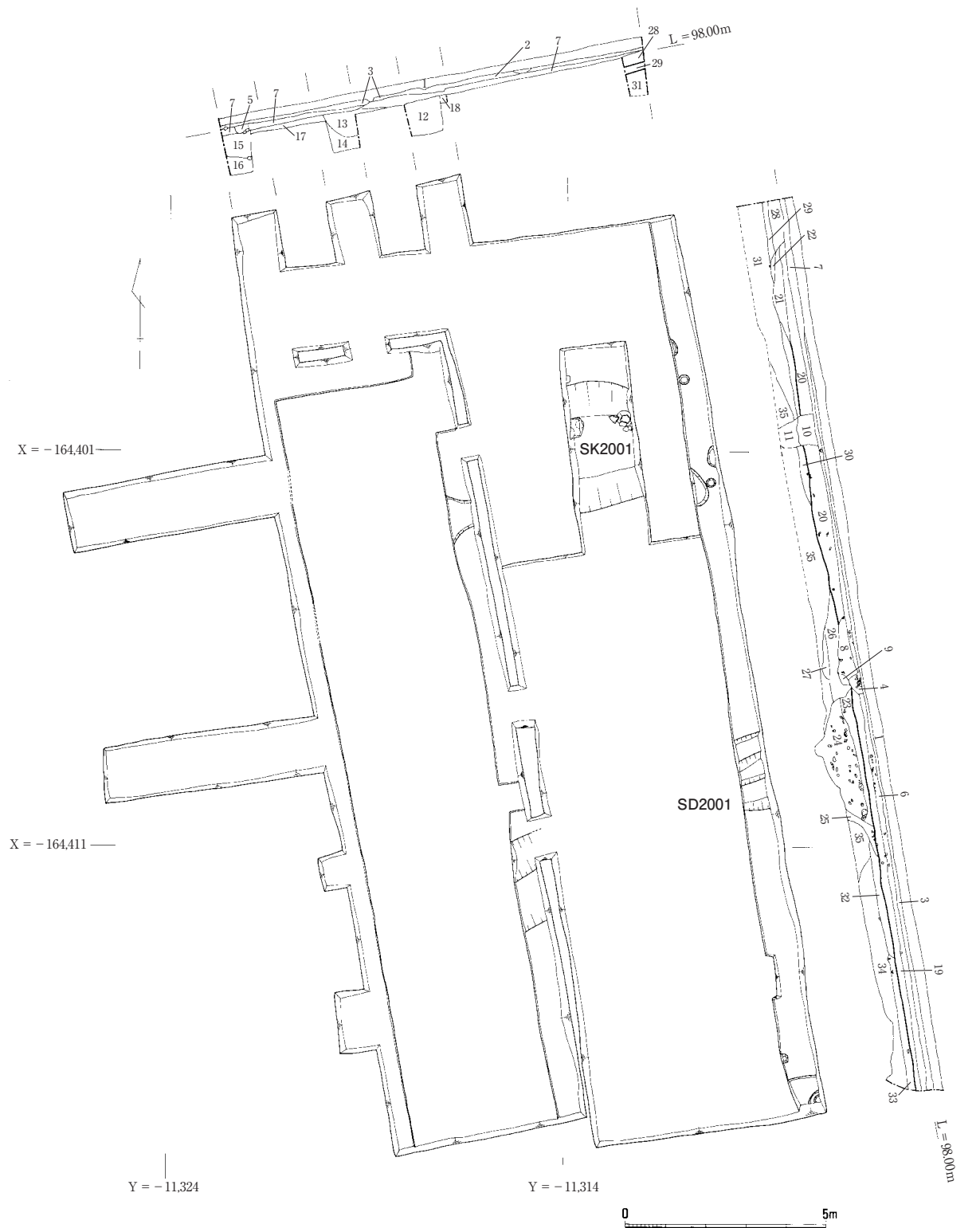
調査は第1次調査では東西5m、南北20mの発掘区を設定し、第2次調査はその東に同じく東西5m、南北20mのトレンチを設定して行った。第1次調査では当初予想していた通り、耕作土（第1層 灰黒色土層）を除いた段階から遺物は出土し始めた。耕作土下の床土の下には灰黄褐色土（第2層）がトレンチ全面に及び、この土層からは古墳時代中期の土器片が出土するが、その量はあまり多くない。その下層は暗灰褐色土層（第3層）で、縄文後期から古墳時代中期までの遺物を含んでいる。この土層はトレンチ中央やや南寄りまでで、そこから南は礫、砂を多く含む層にかわる。この層からも量は多くはないが遺物は出土する。柱穴掘形はこの遺物包含層である暗灰褐色土層、灰色混礫土層（第5層）上に存在している。もとの地形、およびトレンチ調査の結果、この砂礫層は造成工事の結果もたらされた二次的な埋土であることが明らかになった。広範囲に大規模な構造物を構築する必要から行われたものであろう。この埋土の存在しない調査区北半部の柱穴は、暗灰褐色土層（第3層）上に掘られている。

調査区の東壁の北端から約10mのから南に始まる灰色混礫土層（第5層）は、調査区西壁では約15mところで確認でき、調査区内では北から南西方向に地形に沿って続き、さらにその下層（第6層）は幅約4.3mの溝状に掘られ、最下層はさらに一段掘りくぼめている（SD2001）。中にはより多くの砂礫が詰まっており、大規模な整地土と旧来の地形との間の水はけを考えて行った、人為的な地業と見られる。

（3）検出遺構（図12～14、図版10～14）

土坑 SK2001

調査区内の最下層で検出した南北幅約3m、東西約2m以上の土坑。調査地区が限られていたため、全体の規模は不明。底部北側に礫が見られる。



- | | | |
|-----------------------|---------------------------|-------------------------|
| 1 黒灰色土層（耕作土） | 13 暗褐色土層 | 25 暗黄灰色土層 |
| 2 黒灰色土層 | 14 暗黄褐色砂質土層（黄色粘土のブロックを含む） | 26 暗灰褐色粘質土層 |
| 3 赤褐色土層（床土） | 15 暗褐色土層 | 27 茶褐色土層（黒色・茶色の焼土を多く含む） |
| 4 暗灰褐色砂質土層 | 16 暗黄褐色土層（黄色粘土のブロックを含む） | 28 暗褐色砂質土層 |
| 5 茶灰色土層 | 17 黄灰色砂質土層 | 29 暗黄褐色砂質土層 |
| 6 暗灰褐色砂質土層 | 18 暗褐色土層 | 30 暗茶灰色土層 |
| 7 茶褐色砂質土層 | 19 暗灰褐色土層 | 31 灰黒色粘質土層 |
| 8 暗灰褐色土層（溝状遺構） | 20 暗灰褐色砂質土層 | 32 暗青灰色砂質土層 |
| 9 暗灰褐色土層（硬い） | 21 暗茶褐色粘土層 | 33 暗灰色土層 |
| 10 暗黄灰色土層 | 22 暗褐色土層 | 34 暗茶褐色土層 |
| 11 黄灰色土と暗黄灰色土が入り混じる土層 | 23 暗青灰色砂質土層 | 35 黄灰色砂質土層 |
| 12 灰黒色土層 | 24 暗灰色砂層（礫多し） | |

図12 脇本遺跡第1・2次調査 第1期 平面・断面図（1／150）



図13 脇本遺跡第1・2次調査 第2～3期 平面図 (1/150)

掘立柱建物 SB1001

第1次調査区北寄りで検出した南北棟。第19・20層の暗灰褐色砂質土層の下層の第33層茶灰色土層（第35層の黄灰色砂質土層）を切って掘られた柱穴で、東西（梁間）二間（5.4m）、南北（桁行）四間（14.2m）もしくは四間以上。南北二間の中央にある柱穴を考慮すれば、間仕切りのある、さらに北に延びる建物の可能性がある。柱間の寸法は、梁間2.7m、桁行3.3m。柱掘形は一辺0.9～1.0mの方形で、深さは0.7～1.0m。ほとんどの掘形底部に径30～35cmの柱痕跡を残している。

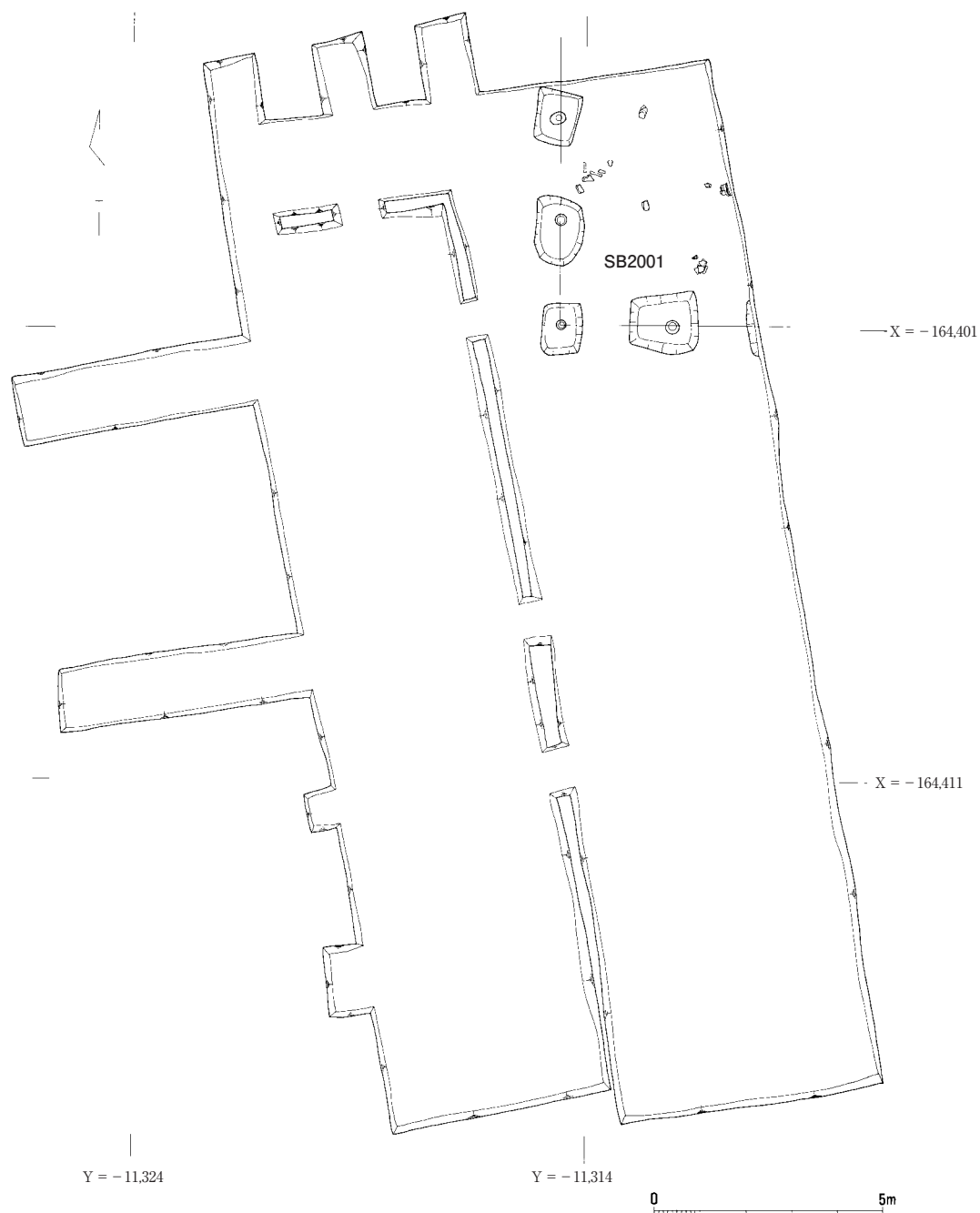


図14 脇本遺跡第1・2次調査 第4期 平面図（1／150）

掘立柱建物 SB1002

SB1001の南約7mから南に、梁間二間（5.4m）、桁行二間以上の南北棟と考えられる。柱穴掘形、柱痕跡ともにSB1001と同規模である。発掘面積が少ないためはっきりしないが、柱通りも共通することから、SB1001と同規模で、2棟は関連する建物であった可能性が強い。

掘立柱建物 SB2001

第2次調査区の北端近くで、第20層の暗灰褐色砂質土層を切って複数の柱穴掘形を検出した。周辺

から出土するのは、須恵器杯片、土師器甑片、など7世紀後半のものが目立っている。南北二間、東西二間分を検出した。柱間は東西2.4m、南北2.3m。方位はほぼ真北である。柱穴掘形の規模は一定ではないが、南北列は南北が長く120cm～150cm、東西列は西端が南北列と同じであるが、第2番目の柱は東西が長く150cm。なお柱の大きさは径25～30cm。遺構の一部を検出したのみで全容は判らないが、柱穴掘形の形態から東方に延びる建物の可能性がある。

土坑 SK1001・SK1002

この砂礫層、つまり整地層の上面にSK1001・SK1002の二つの土坑がある。SK1001は一辺約60cmの隅丸三角形に近く、中央部に人頭大の花崗岩の自然石を置き、それを囲むように3個のそれぞれ形の異なった土師器甕を、口縁部を下に向けて置いている。それぞれの土器の下には小石が1個ずつ置かれているが、他の遺物は確認されていない。SK1001に接するように南側に一辺約50cmの隅丸方形の土坑SK1002があり、内部からはわずかな土器片が見られたのみであった。しかし、この土坑内は高熱を受けたようで、表面が赤褐色に変色していた。2つの土坑は一連のものとみて問題なからう。

その他遺構

第1次調査区の東壁で土器棺と見られる土師器壺の一部を検出した(SX1001)。土師器壺の頸部を欠き、土師器鉢で蓋をしたものである(図版14)。また第1次調査区の西に設けた拡張区(W1区)で南北方向の細い溝を検出している。(前園)

(4) 出土遺物 (図15～23、表5～19、図版42～53)

第1次調査時の図13のSK1001からは土師器片が7点実測できた。布留Ⅰ、Ⅱ式期の甕、小型丸底壺などがある(図15-1～7)。図13のSD2001の第1次調査時の東側壁からは、同時期の大型の丸底壺やS字状鉢などが出土している(図16、図版42)。図16～19掲載の土器は、第1次調査時に主に包含層から出土した。弥生時代後期の叩きを施した平底の甕類、庄内期の手あぶり形土器(図18-47、図版44-47)、庄内～布留期のS字状口縁甕(図18-53～57)や小型丸底鉢(図18-48～51)が多い。同時期の高杯類(図19-89～119)も多く出土した。

図21・22掲載の土器類は、第2次調査時に出土している。図21には、庄内期の甕や高杯が見られる。土器棺に利用されたかと見られる5世紀代の甑(図21-26)もある。図22には、庄内～布留期の土器が多い。図22-36は、同期の土坑内から弥生土器を模した平底壺が出土した。

須恵器は第1次調査で、図20と図23-1が、第2次調査時で図23-2～6・11・14・15が出土している。図20-2～6・14は、SD2001の大溝埋土内部から出土しており、5世紀中～後半段階の特徴を持つ。SD2001の埋没期を示すものか。D区SK2001からも5世紀後半期の壺が検出された。図23-12は、第2次調査区Z区からの出土で、SB1001の土層、SB2001の下層にあたる層から出土した。この南のA・C区からは、第1次調査時に図20-12・13が出土しており、飛鳥期に下る須恵器杯が存在した。図20-18は、上部に三角文、下部には手書き波状文を持ち、朝鮮半島製と見られる特徴を持つ。

出土した石製品には、図24-1・2の紡錘車形石製品、同-3の双孔円板がある。いずれも第2次調査時に包含層から出土した。(清水)